

星逢井戸命洗濯

星逢井戸命洗濯

(二〇〇四年 テアトル・エコー)

（人物）

捻兵衛

おみつ

扇太郎

三平

藤吉

お浜

井戸職人

一

お糸

井戸職人

二

お由

長次郎

源 八

〔一幕〕

文化十四年（一八一七年）文月六日。

江戸深川冬木町の裏長屋。四棟。内二棟（い・ろ）は空店^{あきだな}。

あとの二棟は、扇太郎とお浜、藤吉がそれぞれ住んでいる。

朝焼けの色をおびてくる江戸の空。

明け六ツ（午前六時頃）の鐘、聞こえてくる。

空店^{あきだな}（い）に明かり。お由、日めくりをめくる、文月六日。

扇太郎の長屋に明かり。扇太郎、女物の長襦袢姿で笹竹を抱えて

寝ている。女房のお浜、土間の竈^{かまど}の火を吹き、まな板の菜っ葉を

刻む。洗濯物を盥^{たらひ}に入れる。

盥をかかえて、表戸を開け出てきたお浜に朝日が降り注ぐ。

お天道さまを拝むお浜。

明け六ツの鐘、鳴りおえる。

お浜、勢いよく井戸から水を汲み、既にすこし汗ばんでいる額をぬぐい、空を見上げる。

M（アメリのワルツ）

お浜「さて」ト、洗濯を始める。

大きい物と小さい物とを分別する。

灰汁^{あく}をつかってゴシゴシともみ洗いはじめる。

（※洗濯板はつかわない。まだなかった）

物売りの声が聞こえてくる・・・『シジミ売り』なっとう売り』

『おはよう』のはみがき売り』等々。

お 浜
（路地方向を覗きに行き）おはよ、留さん。なんだい（顔を指し示して）たいそう朝焼けの案配じゃあないかい。その様子じゃ、昨夜はだいぶすすんだね。ひとつ風呂浴びてさっぱりしてからおいきよ。そんな面で普請場に行つたひにや、棟梁にけんつく食わされるのがオチだよ。あ、洗いもの、出しときな。明日は井戸替えだから、今日中に済ましちまうからさ。ああ、いいいい、そこに置いときやいいって。それよか足元、お気をつけよ。朝方の雨でだいぶぬかるんでる・・ほらッすべった。しっかりおしよ。はい、いつといで。あ、ちよいと、竹坊、あとで寄つとくれ。納豆汁にするから叩いたのをおくれな。ぐるつとまわって、しまいに寄つてくれりやいい。ほらほら、しゃんと担がないと、納豆がこぼれちまう。そうそう・・たんとお稼ぎよッ。

お 浜、井戸端に戻り、再び洗濯。

暑い一日がはじまった。

捻兵衛、木戸口方面よりやってくる。

その後ろから長次郎、風呂敷包みを背負っている。

捻兵衛
（井戸端に駆け寄り）おはよう、お浜さん。あいかわらず精がでるねえ。

お 浜
おや、捻兵衛さん。こんな早くっから、どうした風のふきまわしだい。

捻兵衛
店子さんが、商いに入る前に荷物を置きにきたいって言うもんだからね。貸本屋さんだそうだ。

長次郎
よろしくお願えいたしやす。

お 浜 へーえ・・・(ト、長次郎をジロジロと見) ちよいと、若い人。

長次郎 長次郎と申しやす。

お 浜 じゃ、長さんか。ねえ、長さんとやら、言つとくけど、ここは、いつあつちからお呼びがかかってもおかしくないおいぼれが、のったくつてる長屋だからね。若い娘もいなきや、粹な年増もいませんよ。

長次郎 そんなことを当てにしちやいけませんや。大家さんの話じゃ、相場よかだいぶ安くしてくれるつてことだから。

お 浜 え？・・・へえー、そうかい・・・。

捻兵衛 あ、ほらほら、お浜さん。鍋が吹いてるよ。

お 浜 あ、しまった(お浜、あわてて、長屋の中へ)。

捻兵衛 ささ、お入りくださいよ。

ト、捻兵衛、空店(い)の表戸をあける。

長次郎 (蜘蛛の巣を払って) あの、大家さん。ここが、例の二百文つていう・・・。

捻兵衛 そうだよ。ちよいと古いが、ほら、竈だつてまだちゃんと・・・ただねえ、

この竈がねえ・・・。

へ？

捻兵衛 いや、ちゃんと火もおこるし、鍋もまつつぐおける。・・・昼間はね。

長次郎 夜になると鍋がひっくりかえっちゃうんですかい？

捻兵衛 夜中に鍋がごろごろしてなにおもしろいんだよ。

長次郎 そんなじゃ・・・火種もないのに、ぼつと火がつく・・・そりゃ困るなあ。火事は困る。

捻兵衛 そんなお店たながあつたら即刻、取り潰しだよ。

長次郎 ですよねえ。じゃあ、いったいなにがあるつてんです？

掇兵衛 実はね・・・出るんだよ。

長次郎 出る？

掇兵衛 ああ。この竈のまわりにね・・・こう・・・ふわあぁと。

長次郎 って・・・もしかして・・・コレ（幽霊）・・・。

掇兵衛 それもそんじよそこらのは違いますよ。

長次郎 大家さん、またのご縁ってことで。

掇兵衛 待ちなさいよ。そんなにたいそうに出るってわけじゃないんだから。ほんのちつと、ふわあぁと。

長次郎 ふわあぁとだろうがじわあぁとだろうが、あたしや、コレは勘弁なんだ。

掇兵衛 そうかい。なかなかの風情なんだがねえ。白いもんが、こう、ちよちよちよつと、このあたり（竈）を走ってねえ。

長次郎 しろい・・・もんが・・・は・・・はしるうッ。

掇兵衛 そう。ちよちよつとね。ああ、かあいいい。

長次郎 かあいい？・・・（荷を下ろして）人をおこわにかけようって、大家さんも悪い人だ。鼠がチョロチョロするくらいなら、あたしだって怖がりやしません。

それに白鼠なら福の神だ。

掇兵衛 誰が鼠だって言った。指ですよ指。

長次郎 ゆび!?

掇兵衛 白い指。女の白い指。

長次郎 え・・・。

掇兵衛 ふあぁとあらわれて、まるでなにかを探してでもいるかのように、このあたりをするするっとな。

長次郎 やっぱり、またのご縁ということで（ト、荷を背負いかける）

掇兵衛 待ちなさいったら。剛の者がいてね、その指をぐっところ掴んだよ。するとどうだね、その指ときたら、やんわりと握り返した。女の柔らかい指がだよ。

こうね・・・(ト、長次郎の手を握る)

長次郎 (振り払って) や、やめてくださいよ。

捻兵衛 なんだか妙にオツな気分になっちまった剛の者は、ひよいとひっぱってみた。そうすると、ふうつと生あつたかいものが・・・まるで、女の餅肌のような、しめってあつたかいものが、この(肩)あたりに、よよよつともたれてきて、白粉の匂いがふうん・・・朝っぱらからこんな話もなんだねえ。

長次郎 ちよ、ちよつと大家さん。途中でよしはなしですよ。で、そのあとどうなつたんです？

捻兵衛 どうもなりやしないさ。それでおしまい。女の気配はふうつと消えちまった。あとに残ったのは、四本の指だけ。

長次郎 四本？

捻兵衛 ああ。どうやら、女の指は、なくした自分の小指を探していたらしい。どうだい、いじらしい話じゃないか。

長次郎 ……。それじゃ大家さん、またのご縁ってことで(荷を背負う)。
捻兵衛 待ちなさいったら。お前さんに貸すのはこっち。

捻兵衛、空店(ろ)に長次郎をひっぱっていく。

長次郎 え？なんだよ、最初っからそう言ってくれりゃあ・・・。

捻兵衛 ここを四百文で貸そうじゃないか。

長次郎 四百文!?そ、それじゃ、相場じゃねえですかい。あたしは、大家さんが、二百文で貸す長屋があるっていうから。

捻兵衛 二百文はとなり。

長次郎 ひ、ひでえや。

捻兵衛 そりゃね、あんた。あたしだって二百文で貸してあげたいのは山々だよ。あ

んたみたいなきのいい若い人が入ってくれるんなら、タダだっていって思ってるくらいだよ。けど、地主がケチでねえ。地主と店子の間に入ってあたしや、辛いんだよ。あ・・む、胸が痛い・・また持病の癩が・・。

長次郎 (扇太郎の長屋の方へ) た、たいへんだッ大家さんが・

捻兵衛 よしなさいよッ。なんだよ、わざとがましい声をあげやがって。

長次郎 わざとがましいのはそっちじゃありませんか(真似て)む、胸が痛む・・

捻兵衛 そうやって年寄りをいじめてなさいよ。ろくな死に方しないんだから、ふんともう。いいよ、ここが嫌だつてんなら無理にとはいわないよ。そのかわりね、あんた。このあたりにや住めないと、そう覚悟するんだね。

長次郎 え？なんでです。

捻兵衛 なんでですう？五人組をしらねえのかい、この毛才けさいろく六め。あたしが、一言、口をききやあ、このあたりの大家はだあれもおまえさんに長屋を貸しやあしませんよ。へん、ざまーみろつてんだ。ばあーか。

長次郎 ひ、ひでえッ。

捻兵衛 そんじゃひとつ走り、言ってくるかね。ばあーか(ト、ダッシュする)

長次郎 (あわててとめて) ま、まっつてくだせえよッ。

捻兵衛 (勝ち誇り) なんだよ。

長次郎 ・・・くそ大家め・・。

捻兵衛 (耳の穴をほじくる)

長次郎 ・・・。ここは、なんにも出ないんでしょね。

捻兵衛 ん？

長次郎 こっちには、コレ(幽的)は出ないんだらうねつてきいてるんですよッ。

捻兵衛 出ない。

長次郎 ホントでしょうね。

捻兵衛 ああ。ただね・・。

長次郎　　まただよ。

捻兵衛　　どういう訳だかやたらと空き巢に入られる。こんな貧乏長屋になんてだつて思ふかしのれないが、みんな、有り金すっかりやられちまう。まあ、やられるといつたつて、百文、二百文つて程度だがね。それでも一応は言っておかないとね。大家だからね、あたしやあ。

長次郎　　取られるようなもんはなんもないスけどね。

捻兵衛　　そんなこたあないだろう。見たところじゃ、なかなかの男前だ。女のほうから寄ってくる。うまくすりや貢ぐやつもいようつてもんだ。

長次郎　　あたしや滅法界めっぽうかいかたい夕チですツ。

捻兵衛　　そうだろそうだろ。見たところじゃ、まっとうなだけがとりえの野暮天だ。

だから、さぞかし小金をためるだろうよ。

長次郎　　上げたり下げたりするお人だ。

捻兵衛　　どうするの？借りの借りのないのッ。

長次郎　　空き巢ねえ……。まあ、銭はいつも身につけておけば……。

捻兵衛　　そのとおりッ。前に住んでたのは、みんなぞろっぺえなやつらでね、だから空き巢なんぞに入られちまった。その点、あんたはなかなか几帳面そうな……。

長次郎　　もういいですよ。へい、わかりやした。貸してもらいやす。あたしも、そう

そう呑気に探してる暇もないんだ。なにせ、その日暮らしの小商いですから。

捻兵衛　　借りてくれるんだね!? 四百文で！よかったよかった。で、あんた、荷物は、

それだけ？

長次郎　　いえ、あと行李が（ト、後ろをふりむいて）あれ？源八のやつどこいった？

捻兵衛　　お共の人が運んでくるのかい。

長次郎　　あいつ、はぐれちまったのかよ。しょうがねえな。

捻兵衛　　まあ、そのうちやってくるさね。まっつぐ歩いてくりやばかでもぶちあたるから。それよか、お前さん、だいぶ汗をかいてるじゃないか。商いに出る前

に着替えたらいいよ。おい、お浜さんお浜さん。この人の洗いもんもたのむよ。おい、お浜さんッ。

長次郎　いいですよ。今朝、着替えたばかりだ。

捻兵衛　そうかい。はばかりこたないんだよ。あの人は洗い物が好きなんだから。

長次郎　そりゃ、おおきにたすかります。

捻兵衛　なにぶんにも、じじいとばあばばかりだが、心やすくしとくれよ。あ、明

日は井戸替えだから。頼りにしてますよ、長さんッ（ト、すたこら去る）

長次郎　え、井戸替え・・・ったく、抜け目のない大家だぜッ。

長次郎、座敷部分に荷を下ろす。

汗をふきながら見回す。

長次郎　風っ通しの悪イ長屋だなあ。

立ち上がり、外に顔を出す。

長次郎　源八のやつ、どこいつちまったんだ？（ト、キョロキョロするが）ドジをい

つまでも待っちゃいらんねえや。

長次郎、貸本の荷をとき、選別して風呂敷に包む。

残りの本をそのままにして荷を背負いかけるが、ふと気がついて、

押入れを開け、しまおうと・・・

ト、壁のむこうから、ザーツという水音が聞こえてくる。

長次郎

？

お糸「羽織着せかけゝ行くさきたづねゝすねて箆筒を背でしめ

ほんにあなたは罪なひとお。ちよいとおみつやあ

糠袋もつてきとくれえ」

おみつ「はあーい、おっしょさん、ただいまあ」

ザザーツ。

長次郎、外に飛び出し塀に耳をこすりつける。

お糸「あー、いい心持ちだ」

チャップン、チャップン……。

長次郎、塀を探る。石で蓋をしてある節穴をみつけた！

覗く。

お糸「濡れぬさきから浮名たつゝすすきは露を恋したうゝ

ふたりが仲をいぢわるな 風が邪魔してちらちらとゝ

おちて恥ずかし月の影ゝ・おみつ、そろそろあがるよオ」

おみつ「はあーい、おっしょさん、ただいまあ」

長次郎

ひええ……こりやとんだ目正月だぜ（熱心に覗く）

源八が、行李をかついで路地方向よりやってくる。

源 八

あにきのやろう、ずんずん先いつちまうから見失ったじゃねえか。なんだか、

おんなしとこぐるぐる回ってねえかあ？こんなんだったら、曲がりつ角のた

んびに小便ひっかけてくりやよかつたぜって犬じゃねえや……えーと、空店

のある長屋ってえ……（空店（い）に目がとまって）あ？ここかあ？（あ

たりをみまわして）なんだかきつたねえ長屋だなあ。

お浜、出てくる。

お浜 汚くてわるかったね。

源八 あ、こりやどうも。

お浜 なんか用かい。

源八 へえ。あの、ちよつくら人を探してるんですがね。

お浜 ふうん。どんな？

源八 こう風呂敷包みをしよった、歳の頃は三十ちよい前。しかくばった様子はしてるが、実はすけべえという風情・・・。

お浜 (空店ろを指して) あっち。

源八 へえ、ども・・・すけべえだけでわかるとこがすげえな・・・。

お浜 ちよいと。あんたも一緒に住むのかい？

源八 へえ。まあ、そういうことになろうかと。あっしは源八って申しまして、長次郎あにきの弟分ってえか、同居人てえか。

お浜 居候か。

源八 あ。いきなり当てられちまっちゃしようがねえ。

お浜 ふっ。源八ならぬ権八か。いつもびいびい風車ってクチだね。あたしや、お浜っていうんだ。汚れもん出しときな(ト、長屋の中へ)

源八 へえ、どうも。お世話になりやす。

源八、空店(ろ)の表戸を開ける。

源八 あにきッ。(長次郎いない) あれ？

長次郎 (びくつとし) や、源八ッ。おめえ、どこほつつき歩てたんだよッ。

源 八 どころって（ト、塀の方を見るが、長次郎に遮られ長屋へ）あにきこそ、さつ
さと行っちまいやがって（ドスンと行李をおろし）、ここが店賃二百文てえ
長屋ですかい。それにしてもきたねえなあ。まあ、相場よかだいぶ安いから
しょうがねえか。

長次郎 こここの店賃は四百文だよ。半分ずつの割前だから、お前の店賃は月二百文つ
てことになるよ。

源 八 ちよ、ちよつと待ってくれよ。四百文たあ、そりや相場じゃねえか。二百文
の空店があるってえから来たんじゃねえんですかい。

長次郎 （隣を指して）出るんだよ、幽的が。そう言われちゃあ、ここを借りるより
ほかにないだろ。

源 八 幽的？・・ははん、それでよめたぜ。いわくのある空店を安値で釣って、あ
げく、ここを相場で貸すって大家の算段だ。あにきは、まんまとひっかかっ
たってわけだよ。

長次郎 なに？

源 八 まったくあにきは人がいいよ。まあ、あにきがここでいいってんなら、文句
もいえねえわな。なんせ、おいらは権八の身だし。

長次郎 権八って、おめえ、ここでもまた居候をきめこむつもりじゃねえだろうな。

源 八 つもりもつもり、積恋雪関扉。（つもりのこいゆきのせきのと）

長次郎 なに気取ってやがる。こんだは店賃を割前にするって承知で、ついて来たん
じゃねえのかよッ。

源 八 二百文なんて大金、どうすところがあったって、おれには払えませんかや。

長次郎 ふううん・・やい、源八、ちつと座れ。

源 八 なんです？

長次郎 横山町の長屋に、おめえが転がり込んできたのは半年前だ。おれの商売の手
伝いや身の回りの世話をするかわりに一九先生の中本（ちゅうほん）を読ましてくれとおめ

えは言ったよな。

源 八

へえ・・まあ・・。

長次郎

見ず知らずのおめえだったが、心底、読本の好きそうな様子が、なんだかおれには、弟みてえにおもえて置いてやることにした。ところがどうだ。おめえときたら、手伝いどころか、本のやぶれひとつなおすじゃねえ、飯のひと粒も炊くじゃねえ。朝から晩まで寝っ転がって、商売もんの本を読みあさってる始末。一九先生の中本は、人気があるから右から左に借りられちまう。なかなかおれらの手元にやじつとしてねえ。それを、だ。おめえは貸本の包みの中からこっそり盗み出して読みやがったな。おれがまだ斜め読みもしてねえ一九先生の新板しんぱんをだ。湯屋のなじみ客にもっていくと約束してたおれはとんだ恥をかいたぜ。あきれけえったおれが、こんだ引越すとなったら、二度と、不埒はマネしねえからと、店賃の割前も出すから一緒に連れてってくれと、畳にデココすりつけて頼んだのはどこの御仁だ。ええ？

源 八
氣い鎮めてくれよ、あにい。

長次郎
なにがあにいだ。おめえなんぞにあにきのなんのと呼ばれる筋合いはねえよ。

源 八
あにきにおっぽり出されたひにゃあ、とたんに干上がっちゃうよ。こんだは、ちゃんとやるって。

長次郎

さあ、どうだかな。おめえの言うこた、紺屋こつやのあさって、そば屋の釜だ。

源 八

なんだよ、その、そば屋の釜ってのは。

長次郎

湯ばっかり。ゆーばかりってことよ。

源 八

そう言われちゃあ、おいらも縮れっ毛の丸鬣だ。

長次郎

ちぢれっ毛のまるまげえ？

源 八

ゆいたくてもゆえない。

長次郎、ぶっと吹き出す。

それを見て、源八も、ヒヒヒ・・・。

源八　ね、だてに一九先生を讀んじやいねえでしょ？

長次郎　（財布を出し）よし、そのシヤレ百文！（錢を出し）おれの分の二百文とあわせて三百。あとの百文はおめえの割前わりまえと決まった。おっと、とんだ時をすごしちまった（貸本の荷を背負い）そんじや源の字、あとは頼んだぜ（ト、すたこら出ていく）

源八　ちよ、ちよつと待つてくれ。もうひとつひねりだして見せるから百文で買つてくれ・・・ちえつ。

源八、ふてくさつて座敷にごろりとなる。

源八　あにきもなあ、人間がせせこましくつていけねえよなあ。出せよ、四百文くらいよ、ぽーんとよ。あんなじや、当分女はできねえな。

ト、壁のむこうから・・・ザーッ。

源八　？

お糸「あれあれ、おみつ、湯がはねるよお。じつとしておいでな」

源八　!?

源八、外に飛び出し、すぐに塀の節穴を見つけ覗き込む。

おみつ「ふわあぁ、なーとええこころもちだべさぁ」

源 八 ひえひえひええー。こりや、とんだ雛祭りだぜ。

お糸「おまえもひとつおやりよ」

おみつ「わだすは不調法だものお」

お糸「いいからおやりったらあ」

源 八 （目をこすりつけて）ちよ・・もちよつと、こう、ケツをこつちにまわせつ

て・・

おみつ「ほんじゃば、ひどつ・・はあくカニとシヤコとを両手に

持てばくこれがほんとのカニシヤコモチよお」

ケラケラ笑うふたり。

源 八 カニシヤコはいいからよ、こつち向けて・・

バシヤツ！

おみつ「わッ」

源 八 わッ！

お糸「ひやあ、おみつのご開帳ご開帳」

源 八 ヒ、ヒジキと赤貝だ・・（感動）

おみつ「おっしょさんがくすぐっから、すべっちまったでねえの。

ヤンもおお。こっばずかしイ・・あッ」

ギクツとする源八。

おみつ「お、おっしょさんッ。あげなどこに！」

お糸「え？」

バツシャーンッ。

源八　　うわッ（ト、目をおさえる）

藤吉の長屋の表戸、ガラッと開く。

月代みかやせもやや伸びた藤吉が、仏頂面^{ぶつていめん}で出てくる。

屋根と屋根に数本の干し竿がわたされてあり、洗濯物が干されてあり、その洗濯の“幕”は、藤吉の長屋の軒先まで迫っている。

藤吉の長屋の軒下にぶらさがっているのは、禪と腰巻きである。

藤吉、それをうるさそうにはらい、土間に陣取っていた早桶を、

ゴロリと表に出し、塀の前で目をおさえている源八を発見。

藤吉　　？・・おい、なに泣いてやがんだ。

源八　　へ？（あわてて、穴に石をつめ）そ・・その・・。あっしは目エ患っており

やして・・・

お糸「どこにも穴なんかあいてないじゃないか。え？」

おみつ「だども、たすかに目ン玉みたいのが、ジョロリンコと」

藤吉　　（源八を見る）

源八 その・・ね、目の病つてのはね、こう、板塀にこすりつけるとよくなるって
藤吉 話は聞いたことがねえな。

源八 あつしも聞いたことがねえんで。へへへ。

藤吉 (じろりと睨む)

源八 いや、お天道様がのぼると、とたんに明るくなるねえ。なんでもよく見えら。

藤吉 あたりめえだ。日が昇って暗くなったんじゃ、月の休むひまがねえ。

源八 おっしゃる通りッ。まったくお天道様はありがてえ。

藤吉 けッ。ふざけた野郎だ(長屋にもどろうとする)

源八 あ、ごあいさつが遅れました。あつしは、こんだ、こちらにごやかいになることになりました源八つてえもんです。あともひとり、長次郎つてえケチな野郎が一緒ですが、どうかよろしくお見知りおきのほどを。

藤吉 (無視して、踵をかえし自分の長屋へ)

源八 あ、もし。おたくさんは早桶屋さん？

藤吉 たが屋だ。

源八 はあ・・(ト、早桶を見る)

藤吉 こりや道楽だ。

源八 へえ、道楽で早桶をお造りたあ、酔狂なことだが屋。

藤吉 つまんねえこと抜かしてねえで、ひとつばしり、壊れた桶、ひきとつてこい。
源八 なんだつて？

藤吉 朝っぱらからでけえ声出しやがって、つつぬけだあな。割り前、払わにやなんねえんだろが。藤吉んとこの使いだと言えば、すぐに集まる。

源八 ひよっとしてそりや、あつしを小僧につかいてえつてことですかい？藤吉さ
んとやら。

藤吉 親方と呼べ。

源八 ひえ、勝手に決めてやがる。まあ、いいや。で、手間賃はいかほどいただけ

るんで？おやかた。

藤吉 桶ひとつにつき三文やる。

源八 三文はガキの使いじゃねえや。三文じゃ、永代橋渡ったきり戻ってこられねえじゃねえか。せめて波銭二枚にしてもらわなきゃ。

藤吉 なんだと!?八文もふんだくろうってか話にもなんにもなりやしねえ(ト、長屋にひっこもうとする)

源八 ま、待つてくだせえよ。なるほど、あつしも稼がなきゃなんねえ。けど、三文はねえでしよう。

藤吉 そんじゃあ、橋銭は別で四文だ。どうするんだ、やるのかやらねえのか。

源八 ・ ・ ・ 大川、渡らなきゃいいだけの話だ。深川だけで十集めて ・ ・ 四十文。橋銭が四文で四十四文。湯入えって髪結ったら、蕎麦も食えねえ ・ ・ 。

藤吉 無理にはたのまねえ。

源八 わかりやしたよ。こうなりややくそだ。長屋が傾ぐぐれえ集めてきてやるから、早めに腰抜かして待つてろよ。

藤吉 へえ、威勢がいいじゃねえか。

源八 (大きくため息をつく)

藤吉 なんだ。大きく出やがったくせに、いきなりへこんだか。

源八 ・ ・ ・ 親方。親方の前でなんですがね、ほんとはあつしはね、こんな貧乏長屋でうろうろしてるようなヒマはねえんだよなあ ・ ・ ・ 。

藤吉 ふうん。仇討ちでもすんのか。

源八 そんなつまんねえこた、しませんよ。あつしはね、読本書きになるんで。十返舎一九先生のような、中本を書きたいんで。

藤吉 十返舎一九ってえと、とんちきが二人、東海道をうろうろするってえマヌケな話か。

源八 へへへ。読みましたか親方も。

藤吉 人の噂で聞いただけよ。俺やあ、親の遺言で文字は読まねえことにしてんだ。
源八 そりゃ、律儀なこつて・・・実は、ここだけの話ですがね（ト、内緒話の風情）

実はあにきも読本書きになりたがってんですな、これが。もっとも、あつしと違って、あにきには、腹のかわがよじれるようなおもしろい話を書く器量つてもんはありませんがね。

藤吉 一分自慢もたいていにしろよ。

源八 あの人あ、泣本を書きたいんです。

藤吉 泣本、なんでえそりゃ？

源八 どこの色男に騙されて生娘が女郎屋にうられたの、年増と真猫になった渡世人が真人間になろうとしたとたんに死んじまったりってえ話を涙涙で読ませる本でさ。

藤吉 くだらねえな。

源八 げしよう。大見世の花魁と船頭が相惚れになっちゃうってえ話もあつたな。

藤吉 え・・・。

源八 ま、どう転がったって、所詮、泣本なんてのは、娘っこしか読まないモンだからネ。そんなのを書きたいってんだから、あにきもかわつてるよ。けどね、親方。一九先生や三馬先生の中本は違うよ。こう、本を開いたが最後、地震がおころうが火事になろうが読むのをやめらんねえってえ・・・

藤吉 で・・・その・・・花魁は、どうなったんだ・・・。

源八 は？

藤吉 その・・・船頭ってやつと花魁はどうなったんだよ。

源八 はああ？

藤吉 おめえが今、話した泣本の先を話せてんだよッ。

源八 たしかあれば、貸本屋用の読み物で、素人作者が書いた本だって、あにきは言ってたな。ところが、これが結構評判になってね・・・その船頭てのが金

のねえ男で、花魁の借金を返してやれない。そうこうしてるうちにその花魁をうけだしたいってえ男が出てくるんだとか。

藤吉 なににそ、その花魁つてのはどこの見世の女だ。船頭はどこの船宿の船頭だに
源八 つくり話ですぜ。

藤吉 つくりばなし？

源八 そうですよ。なんでも作者は、勘当されたどっかの若旦那だってえはなしで
すがね。

藤吉 ……。

源八 どうなすったんで？

藤吉 いや・・まあ、そういうことなら、せいぜい精進するがいいな。

源八 精進つてなににです？

藤吉 だからよ、そのなんだ。読本書きになったらいいよ。おれは邪魔はしねえか
ら（ト、長屋にもどろうとする）

源八 ちよつと待ってくださいよ。あつしの働きの件はどうなるんで。桶ひとつ
に四文つて。

藤吉 ああ。その話か。

源八 忘れてもらっちゃ困る。読本書きになるにも干上がっちゃまっちゃ元も子もね
え・・（藤吉を押し退けて長屋を覗き込み）なんだよ、桶、ひとつもねえじゃ
ねえの。さっそくひとつぱしり行ってきやしよう（風呂敷を取って）借りや
すよ（去る）

藤吉 お、おい・・けっ・・せっかちなやろうだ。

藤吉、ふと早桶に目がいく。

藤吉 金のねえ船頭に・・花魁が惚れた・・どこぞの若旦那が書いた・・。

藤吉、早桶を感慨深かげになで・

路地にすわり込み、早桶のたがを打ちはじめる。

ト、禪ののれんをふつとかきわけて扇太郎が顔を出す。

扇太郎 おはよう、藤吉。

藤吉 あ、若旦那。おはようございます。今朝はお早いですね。

扇太郎、短冊を下げた七夕の笹竹を肩に、矢立をもっている。

扇太郎 あしたは七夕だからね。お前もなにかお書きよ（ト、懐から短冊を出す）。

藤吉 こりやどうも。

扇太郎 （禪のさきつちよをひっぱってみたりしている）

藤吉 あ、そりや、あつしの・・どうもすいません。まったくお浜さんも盛大に干

したもんで・・（お浜の長屋に）おい、お浜さん、お浜さん。こいつう、ど
うにかしてくれねえか。もちっと脇に・・

扇太郎 お浜は糊売りにいった。

藤吉 へ？さっきまで洗濯してたとおもったらもう？働き者ですねえ、お浜さんは。

扇太郎、床几に腰かけ、筆をかまえる。

扇太郎 どうしたんだい。早くお詠みよ。

藤吉 お詠みついていわれても、あつしには詩歌うたなんぞはととてもとても。若旦那、代
わりに書いてくたせえ。

扇太郎 戯はれうたでもいいんだから。

藤吉 そうですか。じゃあ・・(ト、汗をふきながら考える)

扇太郎 (涼しい顔で空をみつめている)

藤吉 (指をおりながら) “酒のまず・・煙草もやらず・・(扇太郎が書いてないのに気づき) 若旦那、書いてくださいよ。若旦那ッ。

扇太郎 ん？なんだい。

藤吉 あっしのうたを短冊に書いてくださるんでしょう。

扇太郎 ああ、そうだった。

藤吉 “酒のまず、煙草もやらぬ。博打てなぐさみせず女も買わぬ。それで百まで生きたってえ、大馬鹿野郎がいるという、どのだれかとたずぬれば、向こう横町のお稲荷さんの・・

扇太郎 書けない。

藤吉 へ？

扇太郎 もっと短いのにしておくれ。

藤吉 へえ・・そんなじゃあ・・(ト、ふと長屋の壁の貼り紙を見) 小便無用・・

扇太郎 “小便無用、藤吉”と。これでいいかい。

藤吉 へ!?

扇太郎 つるすよ(ト、笹竹につるしてしまう)

藤吉 ええッ!?

扇太郎 (扇太郎、笹竹をかかげ見て) まださみしいねえ。捻兵衛が、手習い師匠のところに行って集めてくると言っていたが・・。

藤吉 ねえ、若旦那。

扇太郎 なんだい。

藤吉 若旦那は・・その・・泣本ってのをご存じで？

扇太郎 ああ、知ってるよ。

藤吉 お読みになったことは。

扇太郎 あるよ。

藤吉 あの・・・ひよつとして・・・お書きになったことも・・・。

扇太郎 ・・・・ないよ。

藤吉 ・・・・。

扇太郎 どうしたんだい？

藤吉 いえ、なんでもありません・・・。

扇太郎 ねえ、藤吉。もうじきお浜は帰ってくるかな。

藤吉 昼までには、まだだいぶ間がありましたよ。

扇太郎 ふうーん・・・。

藤吉 若旦那、お腹がおすきになったんで？

扇太郎 うん・・・実はね、朝は食べたのだけどね、もうお腹がすいてしまったよ。

藤吉 それじゃ、あつしがなんかこさえましょう。

扇太郎 そうかい。嬉しいね。

藤吉 沢庵くらいつきやありませんが、飯は炊いた・・・

扇太郎 湯豆腐がいいな。あつたかいのに、焼きのりをこう揉みこんでサ。

藤吉 へい、わかりやした。豆腐屋ア、まだそのあたりをうろついでるでしょう。

ちよっくら行ってきやす。

扇太郎 手間をかけるね。

藤吉 とんでもねえこつて（ト、行きかけると）

扇太郎 藤吉。

藤吉 へい。

扇太郎 （短冊をつまんで）ひとつ、読んできかせるよ。聞いておいきよ。

藤吉 ・・・・へい。

扇太郎 文月や 六日も常の 夜には似ず。

藤吉 へえ・・・。

扇太郎 (またひとつ短冊をつまんで) 七夕や 秋をさだむる はじめの夜。

藤吉 若旦那はたいしたもんですねえ。

扇太郎 芭蕉の句だよ。

藤吉 はあ。それでもたいしたもんだ。

扇太郎 でもね (短冊をつまんで) あたしはこれが一番好きだよ。 “小便無用 藤吉”

藤吉 勘弁してくださいえよ。 (行こうとする)

扇太郎 足元、気をおつけよ。

藤吉 へえ。お心入れをありがとうございます。 (ごぜえやす)

扇太郎 朝方の雨でだいぶぬかるんでるから (につこりとする)

藤吉 (微かに心にこみあげるようなものを感じて) 若旦那……。行ってきやす。

藤吉、禪ののれんを分けて去る。

空店 (い) にぼんやりと明かり。

扇太郎、煙管を出して吸う。

長次郎、やってくる。

長次郎 台帳を忘れちゃしようがねえや (ト、長屋に入ろうとする)

扇太郎 お前の探し物はここにはないよ。

長次郎 へ？

扇太郎 よし霞、お前、やっと来たね。

長次郎 よしがすみい？

扇太郎 なあ、よし霞や……。まあ、お座り。

長次郎 ……。

扇太郎、長次郎がいる方ではない所を見て

扇太郎 どうした？お掛けよ。

長次郎 ？

扇太郎 さあ（ト、床几の隣りを示す）

長次郎 ？（扇太郎が指した所に座る）

扇太郎 （反対側を向いて）お前は、またそういうつむじ曲がりなことを。

長次郎、びっくりして立ち上がり、よし霞が座ったらしいところ
を見るが・・・もちろんにも見えない。

扇太郎 藤吉は、この十年、毎日、早桶のたがを打っているよ。あの男の意地だよ。

長次郎 （早桶に目をやる）

よし霞や、お前、きっと藤吉をお前のところに連れていっておやりよ。十年
前のあの日、お前があたしに言ったことは、聞かなかったこと。あたしは今
でもそのつもりなんだからね。

長次郎 ……

扇太郎 よし霞。いくらお前が探したって、切っちゃまった指は、もうどこにもないん
だよ。

長次郎 ゆ、指!?

長次郎、思わず空店（い）を見る。

ぞぞツとし、扇太郎を気味の悪いものを見る目で、後ずさりする。

扇太郎 あたしが、大川に捨てたからね。

長次郎 ？

扇太郎 藤吉はね、お前が逢いにきたら、自分も一緒に早桶に入る気だよ。あの男は、お前なしで、もうこっちにいたくないのだ。毎日、酒ばかり飲んでねえ……。

長次郎 ????

扇太郎 お浜の話じゃ、今朝、呑気な男がふたあり、引越してきたそうさ。藤吉とお前を入れた早桶は、そのふたりにかつがせりゃいい。

長次郎 ・・そりゃ・・もしかして（俺たち？）

ト、その時。

お糸 なんだい、この干しもんはッ。おでこ芝居の菰こもじゃあるめえしッ。

お糸、洗濯物をばっさばっさと取り払う。

お糸 ちよいと、捨兵衛のじいさんはどこ行ったよ。今朝からこの長屋うるついでるって聞いたが・・いねえのかい？

長次郎 あ、あんた・・（ト、自分の長屋の塀の方、つまり、今朝、覗き見してたトコ、を見る）

お糸 おや？おやおや、今朝のあたしらの行水を覗いてたのはおまえさんだったのかい。へええ、そりゃ、随分と高いものを見ちまったねえ。

長次郎 は・・。

お糸 木戸銭を出しなッ（ト、手を出す）。

長次郎 ええッ！

不敵に長次郎をねめつけるお糸。

ぶかありと煙草をふかす扇太郎。

溶暗。

団扇売りの売り声が聞こえてくる。

『本渋うちわく、更紗うちわく、反古^{ほご}うちわく』

木戸口方向（もしくは客席より）より、団扇売りの三平が来る。

その後ろからはおみつ。

三平 てえげえにするべき、ねっちゃんの裸なんか見るやづはいねえつで。

おみつ （ポカリと叩き）なに呑気こいでるだ。ねっちゃんはな、こう両足ばガバツとおっぴろげだどこサ、ずばーつとみられちまったんだよ、ずばーつと。

三平 （うんざりして）あーそーだべか。

おみつ この長屋のだれかにちげえねえんだ。嫁にしてもらわねば。

三平 嫁？ねっちゃ、この長屋には、半分死にかかったじじいっかいねえど。それでもええだべか？

おみつ （少し考えるが）ええ。半分おっ死んでようが、八割がたくたばってようが嫁にしてもらわねばなんねえ。

三平 （呆れ果てて）勝手にするがええだ。おらは知んね。

おみつ （ポカリ）おめえの仕事だべ、三平。

三平 おら、ねっちゃんのおっとう探しに団扇売って歩いてんじゃねえずらよ。

おみつ ずら？ずらとはなんだ、ずらとはッ（ポカリ）なんで駿河にかたむくだ。生まれ在所を粗末にしたらバチあたるだ。

三平 てやんでえ。お江戸は田舎モンの寄せ集めだがや。西から北から南から、仰山出てきよって、みやあみやあズー、かしましゅうてかしましゅうてかなわんでごわす。

おみつ （ため息をついてしゃがみこみ）なっさげねえ。我がおどうどサ、すっかり

江戸の毒気サあたっちゃまっただ。とりがえしがつがねえ・・・わだすもずばーつ
・・・。

三 平
ねっっちゃは、言うことが大仰だべ。赤貝みられだぐれえで、ぐったらぐった
ら言ってたたら、お江戸ではくらしていけねえだ。

おみつ
赤貝？

三 平
おなごのあそこサ、赤貝と言うだべよ。なんも知らねえだな、ねっっちゃは。

おみつ
（思わず見る）ここさ、赤貝？

三 平
んだ。

おみつ
ふううーん（しみじみ見る）うめごと言ったもんだべな。

三 平
な、なにしてるだッ（ト、あたりを気にする）

おみつ
三平、おめえ、そげなごとだれに習っただ？

三 平
お浜さんとこのじっさまだべ。

おみつ
へ？あの、いつもぶうらぶうらしてる扇太郎とかいう・・・

三 平
んだ。あのじっさま、あげなふうに見えて、昔は大店の若旦那だったんだべ
よ。お浜ばあさんが自慢してただ。

おみつ
ひええ、あのじっさまが・・・んじや、おい、三平。ねっちやをずばーつと
見たんは、あの扇太郎じっさまだっただな。

三 平
なんでそうなるだよ。

おみつ
大店の若旦那つうのは、遊び人が多いだよ。うちのおっしょさんから、そう
聞いたことがあるだ。

三 平
して、なんでねっちやを覗くだよ。

おみつ
玄人のおなごに飽きて、素人の赤貝サ、おがみたくなつたからにきまつてる
だよ。そーがあ、わだすの赤貝サ、見だのは、あのじっさまかあ・・・そりや、
そうだべなあ、毎日、ばばあの煮染めたむきみばっかりじゃあなあ。よしッ、
決まった。

三平 なにが決まったんだべよ。

おみつ 三平、ねっちゃん、扇太郎じつさまの嫁になるだ。それがおなごの道というも

んだべ。さっそくおっしよさんにお暇をもらわねば（ト、いそいそと去る）

三平 お、おい、待てよ、ねっちゃん（後を追う）

溶暗。

物売りの声が聞こえる。

『甘酒〜イ、甘酒〜イ』ところてんや、てんや〜』

『え〜煮豆〜い煮豆』等々。

井戸の上の空が暮色をおびてくる（夕七ツ頃）

西日がきつい。セミの声。

早桶は仕舞われていて、表戸も閉まっている藤吉の長屋。

中からたがを打つ音がする・・・コン、コン、コンツ・・・

長次郎の長屋に集まっているお浜、お糸、長次郎。

三人で本の修繕をしている。（長次郎は、お浜が持ってきた糊でやぶれを直す。お浜は、ほつれた綴じ目を糸でかがる。お糸は、

手伝っているふりはしているものの、ほとんどサボっている。本をぺらぺらめくってみたり、煙草をすってみたり）

長次郎、傍らの茶を飲み、お浜が持ってきたアサリの煮つけを一口つまむ。

長次郎 うまい。こりやうまいスねえ。

お浜 だろ。アサリのむきみつてのはのんびり煮ちゃだめなのさ。さつとね。

長次郎 あ、迷い蟹だ。

お糸 （素早く手を出し食べる）好きでねえ、これが。

長次郎 (むっとするが、修繕に戻り) それじゃ、そのよし霞・お由さんってのは、十年前の八幡さまの祭りの時に？

お浜 ああ。永代橋が崩れ落ちてさ。もったも、亡骸はまだ上がっちゃいけないけど。

お糸 土左衛門があがらないから生きてるってのは、無体な話だよ。なんせ、あん時は千人がとこ、大川に落っこちまったんだからさ。

お浜 そう言ったってお糸さん。藤吉さんにしてみりゃあ、お由が死んだってんなら亡骸を持ってきてみるってことなんだよ。一本気なお人なんだよ、藤吉さんてのはさ・手を動かさなね。

お糸 あーい(ト、嫌そうに糊をこねる) あの藤吉ってじいさんさ、あたしはよく知らないけど、いっつも仏頂面をして、あたしが愛嬌たっぷりに挨拶してやつたって、ふいと横をむくよ。

お浜 あんたみたいに、じゃらけっばい女は嫌いなさ。

お糸 ふーんだ・・あら、枕本ッ。

長次郎 (ひったくって) 二十四文ッ。ただでは見せませんッ。

お糸 それじゃ、朝の見料と差し引きでどうだい？あたしの方もただでは見せられないんでねえ。

お浜 なんの話だい？

長次郎 (あわてて) そ、それにしても藤吉さんてのは、たいしたお人ですね。小見世といたって、花魁を女房にするなんてね。

お浜 お由さんは、もとは江戸えど町ちょうの大見世の座敷持ちだったのさ。うちの人は、その若旦那。

長次郎 それでみなさん、若旦那って。けど、そんなお人がなんでまた、こんな・おちぶれちまったのかって言いたいんだろ。それには深いわけがあるのサ。

それじゃ、一息いれさしてもらうかね(ト、茶を飲む)

お糸 お浜さんのオハコがはじまった。長いよ。

お 浜 お由さんがまだ、よし霞って呼ばれて、若旦那の見世の花魁だった頃、あがったのが藤吉さんさ。藤吉さんは猪牙舟ちよきぶねの船頭でね、そりゃあいなせでいい男だったって、若旦那が・・・今みたいにぼんやりする前に、あたしや、何度か聞いたことがあるよ。

長次郎 そいつあ、おおきに女にもてたでしょうね。

お 浜 (大きくうなずき) 藤吉さんも、遊びは玄人から素人まで、そりゃ、たんとこなしたお人だろうよ。それなのに、よし霞に本気になっちまった。よし霞の方も、おんもりした夕チのくせに、出は下級武士の娘だったとかで、妙に一本気なところがある。ふたりはたちまち相惚れさ。

長次郎 で、藤吉さんはよし霞を身請けと。

お 浜 そうなりや苦労はなかったんだけどね。実入りもあるかわりに出ていくのも多いのが色男のさだめさ。そのうち、よし霞を身請けしようって客があらわれちまった。さあたはいへん。このままじゃ、ふたりは泣く泣く別れなきやならない。そこへ助すけけて出たのが扇太郎さん、うちの若旦那すさ(ト、ぼんつと帯をたたく)

お 糸 よッ、待ってました！

お 浜 若旦那は、よし霞とデキちまったふりをした。もちろん、よし霞と藤吉さんの三人で口裏をあわせてのことさ。

長次郎 ちっと待ってください。そりゃ、突通しの仲ってことになりやしませんかい。そいつあ、まずい。旦那や若旦那が自分の見世の花魁と深い仲になるのはご法度だ。

お 糸 さすがあ、貸本屋ッ。だてに風呂敷包みしよつてのつたくつちやいねえねッ。

長次郎 よッ、本屋の鏡ッ(ト、長次郎の湯飲み茶碗に煙管の灰をぼんつとおとす)

長次郎 ？・・・なにした？

お 糸 なんも。(お浜に寄って)で？

お 浜 若旦那は知り合いの新川の酒問屋にあずけられ、よし霞は小見世におとされた。よし霞を身請けしようとしていた客はもちろん、愛想づかしさ。

お 糸 ありあゝ。

お 浜 それから十五年近く、お女郎でかせげなくなつてからは、茶屋の下働きまでして、よし霞は借りを返し、藤吉さんの方も地道な商いと、いまの職を手につけ、晴れてふたりが所帯を持ったのは、よし霞が三十も半ば過ぎ、藤吉さんの方も四十を出た頃だったのさ。こうしてふたりは、とも白髪までといくはずだった・・・十年前、永代橋が落つこちるまではね・・・。
長次郎 ふうーむ（感慨深し）じゃあ、ふたりが一緒に暮らせたのは、ほんの短い間だったんですねえ。

お 浜 一、二年ほどだったよ。

お 糸 うこぼれ松葉はあやかりものよ 枯れて落ちてもヤンレ夫婦づれ

長次郎 松葉は枯れ落ちても二本一緒か・・・藤吉さんとお由さんもさぞかし、一緒にいたかつたらうにねえ・・・（茶を飲む）げッ（お糸を見）やっぱりさつき！
お 糸 う初手に惚れたは あたしが悪い 手出したのは主が負け（アツカンベエする）

長次郎 こ、このお。

お 糸 まだ続きがあるだろ、お浜さん。ほら、あんたと若旦那のなれそめ。

お 浜 へへへ。その話もすんのかい？（柄になく色っぽくなり）知ってるくせに。

お 糸 なんべんでも聞きたい。

お 浜 （茶をぐくと飲み）あたしは、日本橋は照降町てりふりちょうの下駄屋の娘でさ。ああ、ついでだがね、大家の掎兵衛、あいつは傘屋の三男坊。「照れ照れ、降れ降れ」ってんで、親は仇同士の商売だが、あたしらは仲が良くってね。けんかもしたがよく遊んだもんだよ。

長次郎 へえ、あの大家さんと幼なじみなんですかい。

お 浜 親としちゃ、末は一緒にさせるつもりだったかしれないねえ。なにせ、下駄屋と傘屋が一緒になりや、全天候型商いってことになる。

お 糸 食いつばぐれがなくていいやね。

お 浜 ところがそうはうまくいかないのが、浮世じゃないか。だろ？

長次郎 ちげえねえ。

お 浜 新川の方に使いに出された時に、若旦那と逢っちまったのさ。

お 糸 逢うがくわかくれの

長次郎 (遮って) で、どうしました？

お 浜 体の弱かったおつかさんのかわりをして弟や妹の世話をしているうちに、あたしや、もう二十五をとうにすぎた大年増で、自分でもこのまんま嫁かす後家になるものとおもっていたのに、これがなんと若旦那に一目惚れ。その晩からぶらぶら病さ。

長次郎 恋わずらいかあ・・・

お 糸 く下駄屋の嫁かす後家のお ぶらぶら病 なにやらどうにもやかましいく

カタカタぶらぶら カタぶらカタぶら ガチャカタぶらガツチャガツチャ

長次郎 やかましいのはためえだッ。

お 浜 (ため息) 出るのはため息ばかり。

お 糸 く屁が出る間もありやあせぬく

お 浜 見かねた親が、若旦那の素性を調べたところ遊廓の息子だつてえじゃないか、それも大見世の。今は事情があつて新川の知り合いのところにも身を寄せてはいるが、いずれは見世の後を継ぐ人だ。お浜や、扇太郎さんが住んでるのは、あたしとは別の浮世なのだよつて。

長次郎 ア痛たたあ。

お 浜 あの人が、お前なんかを好いてくれるはずがない。万が一、好いてくれたとしても、お前に色街のお内証がつとめられるはずもない。お前は捨兵衛のタ

コと一緒にするのが身の丈、身の幸せってもんだ・・・。

お糸 だだだな（煙管をふかす）

長次郎 （じろりと睨む）

お浜 捨兵衛さんはそろそろ三十に手が届く頃だったけど、男だからまだいくらでもおかみさんの来てはあった歳だよ。

お糸 けど、タコはそのあともずーっと独り身さ。だろ。

お浜 そりゃそうだけど、あたしのせいなんかじゃありやしないよ。

お糸 そのとおり。タコのせいさ。タコに甲斐性がないせいだ。タコが悪い。

長次郎 タコはおいといて。で、若旦那をあきらめると言われて、お浜さんはどうなすったんで？

お糸 そこであきらめないのが、この人の片意地なとこでねえ。

お浜 身の回りの物をまとめた風呂敷包みをかよわい肩に背負い、右手にすがのもりじんじや梶森神社の富くじ、左手に若旦那をかかえてかけおちさ。

長次郎 そりゃ、かけおちと言うんですかい？ お糸 かどわむし 勾引と言うやね、ふつう

は。

お浜 若旦那は言ったよ。お前は少し、しゃにむにすぎるところがあるが、それほどあたしのことを好いてくれるとおもえば、いっそかあいいよって。

長次郎 それで、めでたく若旦那の世話女房と。

お浜 （頷いて）けどさ、あたしが横紙を破ったせいで、若旦那には、気の毒なことをしちまったんじゃないかって・・・ね。

お糸 そうさね。あんたがあきらめりゃ、若旦那はいずれは見世に戻れたものを。

長次郎 けど、もう後には引けやしない。

お浜 あたしや、若旦那のためならなんだってやったよ。朝はガキのむこうはってシジミ売り。昼は昼で、春なら桜草、夏はほおずき、秋はすすきで冬には室咲きの梅って具合にね。日が落ちてからも、じつとしちやいないよ。料理屋

の女中に、寄席の木戸番、夜中だって寝てるもんか。駄賃をもらって丑の刻参り。

長次郎　なんだってえ？

お浜　かわりに御神木に五寸釘を、こう、打ってやるのさ。

お糸　すさまじい女だね。けど、それだけつくしたつてのに、若旦那、ここ（頭）がびよびよになっちまってさあ。

長次郎　はあ、やつぱりそうなんで。今朝も、その床几に座って、なんだか様子がへんでした。

お浜　へんなのはしよっちゅうさ。

長次郎　よし霞・お由さんですか。その人としやべっているつもりだったようで。

お糸　お由さんが死んじまったのもわかんなくなっちまったのかねえ、若旦那は。

お浜　（大きくため息をつく）

長次郎　お浜さんも苦勞しやすねえ。

お浜　・・・あたしや悔いてなんかいないね。もし、あの時、おとつつあんの言うことを聞いて、捨兵衛さんと一緒になつていたつて、今頃は、この女に追っかけられてるのがオチなんだからね。

お糸　ふふふん。

お浜　捨兵衛はばかだよ。だまされて博打ばくちなんか手を出すから、こんな女から金を借りるハメになっちまうんだよ。

長次郎　ええッ!? 大家さんが博打を？

お浜　しまった・・・内緒だよ。

お糸　一分、二分とせせつこましく借りにきて、締めて二両がとこ、都合したかね。

お浜　ほんの小博打さ。それも騙されたんだ。捨兵衛さんが悪いんじゃない。今じゃすっかり足をあらったつて。けど、そんなことが地主おおじに知れたら大事だから、長さん、くれぐれも・・・ね。

長次郎　へい……。それにしても、まったく人は見かけじゃわかりやせんねえ。若旦那といい、藤吉さんといい、お浜さんといい、大家さんといい……。浮世は洒落本より奇なりつてこと……。あれ？……。こんな話が確か……。

ト、長次郎、貸本の荷を探しはじめる。

お浜　長さん、あんた、読本書きになるんだってね。藤吉さんから聞いたよ。

長次郎　んな、あつしなんかにとても……。

お浜　隠すことないじゃないか。ねえねえ、若旦那とあたしのことを、書いてもいいよ。けどね、下駄屋の娘じゃなくなつて履物問屋の娘にしておくれよ。歳も十九ぐらいにはしよつてさ。それと、丑の刻参りのところは削つておくれよ。

長次郎　へえへえ、わかりやした（ト、荷を探している）。

お糸　ちよいと、元大店のお嬢様。捻兵衛の借金、あんたがかわりに返してくれてもいいんだよ、幼なじみのよしみつてやつてさ。

お浜　なんだつて？馬鹿お言いでないよ。誰がお前なんかに戻すもんか。このガリガリ亡者。

お糸　ずいぶんな言いぐさじゃないか。貸したものを返してくれと言ってなにが悪いんだよ。女がひとり、生きていくんだ、頼りになるのはおあしき。あたしやね、あんたや若旦那みたいに霞食つて生きちゃいけないもんでねえ。

お浜　ふん、常磐津なんて看板を出しちやいるが、裏でなにしてんだかわかったもんじゃない。長さん、あんたもこの女にだけは金を借りない方がいいよ。

長次郎　（何度も頷いて）借りるもんですかいッ。

お浜　そんならよかった。

お浜、くるとふたりに尻をむけて、明るいほうに手をかざして

針に糸を通す（いつのまにか、もう日は落ちている）。

お糸、長次郎を流し目で見、塀の方に視線をうつす。

長次郎
（びくつとする）

お糸
貸してやってもいいんだよお。

お浜
え？

長次郎
い、いや、借りません。絶対借りません。

お浜、ふたりをじろりと見るが針に戻る。

長次郎
（慌てて財布を出し）に、二十四文？朝の、その・・・。

お糸
あーん？

長次郎
じゃ、じゃあ、あの・・・三十文。

お糸
まけといてやるよ（ト、さっさとしまう）

お浜
なにしてる。

長次郎
あ・・・いえ、今朝、ちよつと、その小銭がなかったもんで。

お浜
（じろりとみて）どいつもこいつも・・・。

掬兵衛、大きな風呂敷を背負った源八と、やってくる。

掬兵衛
そうかいそうかい、そりゃあよかった。藤吉さんもね、強気なことを言うてるがもう年だからねえ。あんたみたいな若い人が手伝ってやれば、ここ（心）中じゃ喜んでるんだよ。まあ、そんなそぶりを見せないのがあの男だけだね。ささ、親方をよろこばしておやり。

ト、捨兵衛と源八、藤吉の長屋へ。

お糸 おツ、捨兵衛、きやがったな（立ち上がる）今日こそ金、ふんだくってやるんだから。

お浜 おまちッ。

お糸 なんだよ。

お浜 明日は井戸替えだ。捨兵衛さんの差配さはいがなきやできねえんだよ。お前のせいでどつかにトンズらでもされてみる。めいわくなんだよ。すっこんでなッ。

お糸 おー、こわ（ふてくさってどすんとすわり込み煙草をふかす）

源八 親方ッ（表戸を開け、風呂敷包みをひろげて）本所まで足のばして、二十だ。

捨兵衛 いいたすけができたじゃないか、藤吉さん。

源八 永代橋は渡らなかつたが、きまりはきまりだ。橋銭はもらいますからね。しめて八十四文。

藤吉 （懐から銭を出して）きりが悪い、百もってけ。

源八 うへ、こりや気前がいいね。さすが親方だ。

藤吉 まあ、飲みねえ。

捨兵衛 また飲んでるのかい。すぎると毒だよ。

藤吉 いいってことよ。どうせ余りの浮世だ。大家さんも一杯やんなせえよ。

源八 ささ、やりましょやりましょ。

ト、捨兵衛と源八、藤吉の長屋で飲みはじめる。

長次郎の長屋では、お糸があいかわらず、やる気なさそうに糊付けをしている。長次郎は、探してた読本が見つかったらしく読んでいる。

お浜、あたりをざっと片づけて

お浜 若旦那が戻る時分だからあたしや行くけどさ、あとで夕げのおかずをとり
きなね。

お糸 あーい。

お浜 長さんに言ったんだよッ（ト、自分の長屋に帰る）

お糸、すぐに糊付けをやめ、枕本を手にして

お糸 （枕本を逆さにしたり戻したりしながら）へへへ、たいした所作だね。ねえ、
長さん、こういうのつていい稼ぎになるんだろ？

長次郎 （読んでいる）

お糸 けっこうため込んでいるんだろうねえ・・・

長次郎 （読んでいる）

お糸は、長屋を物色するようにながめるが、そおと押入れの戸
を開け・・・長次郎をうかがう。

長次郎が気づかないのをたしかめて、しまつてあつた貸本を物色
しだす。

ト、源八が表戸を開ける。

お糸、あわてて、押入れの戸を開めて中に入ってしまう。

源八 あにきッ。おいら、今日いちんちで、店賃を稼いだけ。あにきも飲まねえか。

長次郎 へ？飲むっておめえ・・・

源八 親方のおごりだよッ。ほらほら。

ト、長次郎をひっぱって藤吉の長屋へ。

藤吉 おう。おめえか、長次郎ってえケチなやろうは。

捻兵衛 その上、えらく臆病モンなんだよ、この人あ。ケケケケ（酔ってる）

長次郎 大家さん。

藤吉 飲め。

三人、長次郎を巻き込み盛り上がる。

路地方向から、扇太郎、笹竹を背にふらりとやって来る。その後ろから三平。

三平 ですからね、若旦那は、昨今、その・・赤貝を見た・・ことは・・。

扇太郎 （三平を見る）今朝、アサリの煮つけを食ったよ。

三平 いや、アサリはどうでもいいんで。その・・赤貝・・

お浜、出てくる。

お浜 あら、若旦那、おかえりなさい（笹竹を見て）おやまあ、だいぶ賑やかになっ

たねえ（三平に）三ちゃんも、書いたかい？

三平 いえ・・。

お浜 早くお書きよ（扇太郎に）筆と短冊をかってやっってくださいな（ト、受け取り）はい、三ちゃん（ト、筆と短冊を渡す）若旦那は、足をすすいでくださいよ。お湯までにはまだ間があるからひと休みして、ね。あたらしい浴衣を出しますから。ささ（ト、促す）

扇太郎 まだ赤貝の話が・・（ト、三平を見る）

お浜 え？赤貝？赤貝がどうかしたのかい？

三平 いや・・・あの・・・

お浜 アサリの煮つけならあるけど、持っていくかい？

三平 い、いえッ。

お浜 ・・そうかい。美味しいのにねえ。

お浜、扇太郎を促して長屋へ。

三平、ふううとなる。

おみつの声、聞こえてくる。

「カニとシヤコとを両手に持てば〜これがほんとのカニシヤコも

ちよ〜」

うへっとなる三平。

おみつ (やってきて) どうだった？話まとめてくれたただか？

三平 (カツとなつて) おらはやんだッ。おら、この役おりするベッ。

おみつ なんだべいきなり。

三平 お浜ばあさんにバレそうになつて、おら肝をひやしただ。

おみつ バレたらバレたで、しかたなかんべよ。煮くずれたアサリにはお引き取りサ
いたでえて、コリコリの赤貝・三平、おめえなにしてるだ。

三平 見りやわかるべ。七夕さまに願えごと書くだ。ねっちゃんに、ええおっどうが
できるようにと書くだよ。おらにはそれっくらいいっきやできね・・・

おみつ ・・・・。ふーん。短冊か(吊るしてある短冊を見て)こりや、表通りの手習
い師匠のところのだな。

三平 そうけ？・・・へのへのもへじつてのがあるべ。

おみつ あーそりや、魚屋の亀吉んだ。しょうがねえべ、あの悪ガキア。そう言や、

三平、おめえもガキの頃はとんでもねえ悪ガキだったべよなあ。寺の井戸にふかし芋投げ込んだことがあったべ。

三平 ありゃあ、供え物だ。井戸神様に供え物しただ。いつだったか、寺の井戸から、政五郎のかあちゃんの簪が出てきたことがあったべき。

おみつ 政五郎て、おめえの悪仲間の政五郎か。

三平 んだ。政五郎はなんも供え物しなかったに、簪サ出てきた。供え物したら、井戸神様は、おらたちのかあちゃんサ出してくれるかしんねえ・・・。

おみつ かあちゃんて・・・おめえ、そつたらことあるわけなかんべよ。死んだ人が井戸から出てくるなんて・・・皿屋敷じゃあんめえし。

三平 おらはそう思っただよ・・・ガキだったべな・・・。

おみつ そうかあ・・・(井戸を覗いて) 明日は、この井戸も井戸替えだな。おかしなもんが出てこなきやええがね。

三平 んだな・・・。

おみつ (筆と短冊を取り) ねっちゃんも書くべ。

三平 え。

おみつ 三平さ、かあちゃんみたいないおなごができますよーにつて。

三平 ねっちゃん・・・。

おみつ んだから、おめえは赤貝の方サ、頼むべ。

三平 (しかたなく) うん・・・。

ふたり、短冊を書く。

扇太郎の長屋の戸が開き、扇太郎とお浜、出てくる。

お浜 (小銭と手拭いをわたして) 長湯はいけませんよ。のぼせちまうから。

扇太郎 うん。

お浜 はい、いってらっしゃい。

扇太郎 じゃあ、行ってくるよ。

虫売りの声。

丹波ほおずき売りの声。

扇太郎を見送るお浜。

扇太郎、木戸口方向へ歩いてゆき、ふとふりかえる。

扇太郎 お浜。

お浜 はい？

扇太郎 （空を見上げ）もうどのあたりまで来ているのかねえ。

お浜 え？

扇太郎 牽牛と織り姫さ。

空を見上げる扇太郎とお浜。

藤吉の長屋に明かり。

酒を飲んでさわいでいる藤吉、捨兵衛、源八。

その傍で本を読んでいる長次郎。

長次郎の長屋に明かり。

押入れをそっと開け、顔を出すお糸。

枕本を数冊、懐に入れて、にやりとする。

空店（い）に明かり。日めくりの前に座っているお由の後ろ姿。

暮れ六ツの鐘。

幕。

〔三幕〕

セミの声に混ざって、井戸替えの掛け声が聞こえてくる。

空店（い）に明かり。日めくり、文月七日。

明かり入る。

朝五ツ（午前八時頃）。

笹竹が、屋根の上にたてられてあり、短冊や吹き流しがたなびいている。

どぶ板はあげられ、井戸の化粧側けしょうがわもはずされている。

井戸の上には丸太で櫓が組まれて、縄がかけられている。縄の一方には大きな桶、もう一方を、井戸職人一、二と源八、長次郎、そして藤吉が引つ張っている。

捻兵衛は、ねじり鉢巻きにもる肌脱ぎといういでたちだが、掛け声ばかり。

職人一 おーりやおりやおりやあ〜。

職人二 桶おけア〜巻まア〜いてえ〜。

皆な つしよおいッ。

職人一、あがってきた桶の水を捨てる。

職人一 もいっちようッ。

職人二 桶ア〜巻ア〜いてえ〜。

捨兵衛　そおれいッ。

藤吉、つんのめる。

源八　親方。もう、あつしらにまかしてくださいよ。

藤吉　そうはいくか。井戸、浚きざうのはおれ。笹竹流すのは若旦那と、毎年のきまりごとだ。それ、いくぞおッ。

職人二　桶アゝ巻アゝいてえゝ。

皆な　っしよおいッ！

藤吉、腰が抜ける。

源八　親方ッ。

捨兵衛　意地張ってないで、こっちこっち。おい、お浜さん。

ト、捨兵衛、藤吉を抱え込んで扇太郎の長屋の方へつれてゆく。

お浜　（素麵を手に出てきて）あら、どうしたんだよ、藤吉さん。

捨兵衛　腰をやっちゃったらしいんだよ。

お浜　あれまあ。だから、若いもんにまかしたときゃいって言ってんのに。

藤吉　べらぼうめ。ちよっくらひねっちまっただけよ。

捨兵衛　ちよっとなって言ってもね、年寄りはおとがこわいんだからね。

お浜　とにかく中にお入りな（ト、長屋へ）

職人一　あと一息でえッ。

職人二　ほウらほらほらアッ。桶アゝ巻アゝいてえゝ。

皆な つしよおいッ!

職人一、桶から水をあげ井戸の中を覗き

職人一 よおし、たわしィ、貸しちくれ。

捻兵衛 はいはい(ト、縄たわしを渡す)

源八、長次郎、ほっとして汗を拭う。

捻兵衛 さあさ、あとは井戸亀さんにまかして、あんたらは一息いれておくれ。おー

い、お浜さん、茶をくれねえか。

お 浜 (中から) あいよお。

職人一・二、桶から縄をはずし、職人一の体にまきつける。

職人二、片方の縄を持つ。

職人一、井戸枠の上に立つ。

職人二 あらよツと(縄たわしを投げる)

職人一、たわしを持って井戸の中に入っていく。

職人二、縄をすこしずつおろしていく。

職人二 よしか?

職人一 (中から) おう。

職人二、縄の端を近くの木かなにかで動かないよう固定し、縄たわしで、化粧側を洗い出す。

ト、そこへ、お糸、着物の裾をからげ、流れてくる泥水をよけながら、酒樽をかかえて木戸口方向より来る。

後ろからおみつ。

おみつ　ですからね、おっしよさん。あたしの赤貝・

お糸　うるさいねえ。あたしや、貝は嫌いなんだよ。昨日、お浜さんの煮染め食って、腹下しおこしちまったんだから。

おみつ　へ？お浜さんのあさをりを・

お糸　おみつ、おまえいつまであたしの後くつついてんだい。さっさと家に帰って用事を片付けちまいな。ほら、行った行った（ト、追っ払う）

おみつ、渋々去る。それを、汗をふきながら、ふと目で追う源八。

お糸　なんだねなんだね。まだやってんのかい。しょうがねえな、おいぼればつかで・・・（職人二の刺青を発見）およよ、こりや珍しい彫物だ。うろこ雲からオコゼが顔出してるよ（背中を見て）やや、お多福が日輪様を仰いでる。（お糸の手を振り払い）てやんでえ（右腕左腕）登り竜に下り竜（背中）観音様をしょってんじやねえかッ。

お糸　ええ？

職人二　彫った時分にやそうだったんでえッ。

お糸　ほんじゃ、お前さんにつきあって、竜と観音様も肥えたって寸法かい？こつりやあ、めつずらしいもんを見してもらった。そんで、お前さんが、中（井戸）に入るってか？

職人二 俺・・・は入らねえッ。

お糸 入らねえじゃなくて入れねえだろ。ふふん。大家も使えねえ職人ひっばってきたもんだね。大方、手間賃をケチったんだらうよ。

捻兵衛 ちよろちよろすんじゃないよ。手伝わねえんなら、あっち行っとくれ。

お糸 ごあいさつだね。御神酒をもつてきてやったのにさ。

捻兵衛 え？

お浜 (出てきて) 遅くなっちまってごめんよ。素麺に手間どっちまって。さあさ、麦湯飲んで一息入れておくれ・・・(お糸の持っている御神酒を見て) あら、そりゃ、さつきあたしが若旦那に取りにいつてくれと頼んだ御神酒じゃないのかい？

お糸 ああ。若旦那とは、表通りであつたよ。それで、これを持っていつてくれと頼まれたのさ。

お浜 で、若旦那はどこへ行ったんだい。

お糸 竹村伊勢たけむらいせの巻きせんべいを買いにいくと言つたよ。ついでだから、山屋やまやの豆腐でも食べてくるともね。

捻兵衛 じゃ、若旦那は、吉原へ出かけたつてのかい。

お糸 そういうことになるね。

お浜 今日に限つて、なんで竹村伊勢の巻きせんべいなんか買いにいつたんだろ。

お糸 よし霞が好きだったからつて言つてたけど。

捻兵衛 よし霞つて・・・

お浜 そう、あのよし霞。お由さんのことだよ。実は、昨日つから、若旦那、様子がおかしくてさ。そうだろ、長さん。

長次郎 (ひと休みしていたが) ええ、そうなんですよ。そのよし霞さんに話かけたりしてね。

捻兵衛 話かけた？

源八 よし霞つてのは、親方のおかみさんだった人じゃねえんですか？十年前、永代橋で・・

捻兵衛 藤吉さんから聞いたのかい。

源八 へえ。死んじまったとか、いや、まだわからねえとか、親方、ゆうべ酔っぱらってわけわかんねえこと言っただけだ。

お浜 またいつものとんちんかんだとおもって、たいして気にとめてもいなかったんだけどサ・・吉原まで巻きせんべい買いにいくなんて・・。捻兵衛さん、あたしや、なんだか気味が悪いよ。

ト、井戸の中から

職人一 おう。

びくつとする捻兵衛、お浜、お糸、長次郎、源八。

職人一 笹だ、ざるーッ。

職人二 おかみさん、笹を貸しておくんせえ。

お浜 あ、はいはい（ト、笹を渡す）

職人二 （受け取って）いくぜ（ト、井戸に投げ入れる）

お浜 ねえ、捻兵衛さん。藤吉さんに話した方がよかないかい・・お由さんが戻ってきたかもしれないって・・。

捻兵衛 シなばかなことがあるもんかい。お由さんは、十年前に・・

お浜 死んだってきまったわけじゃないよ。亡骸はあがってないんだし。

捻兵衛 お浜さん、藤吉さんはちゃあんとわかってるんだよ。あきらめてもいるのさ。それを、お由さんが戻ってきたなんて、下手な当て推量を言っちゃあ、かえっ

て気の毒だよ。

お 浜 あたしはなにも、お由さんが生きて帰ってきたんじゃないかなんて言っちゃ
しないよ。

捻兵衛 え？

長次郎 そ・・・そりやどういふことですか？お浜さん。

お 浜 若旦那が、うちの人がなんで急に、お由さんに話しかけるみたいなことを・・・
あたしが気になるのはそこさ。捻兵衛さん。なんだか、あたしは妙な胸騒ぎ
がするんだよ。

長次郎 胸騒ぎ・・・って、お浜さん、気味の悪いこた言いつこなしですよ。

捻兵衛 ・・・・おい、藤吉さんはどこだ？どこ行つた。

源 八 そこで寝ちまつてまさ。昨夜の酒がぶり返したのかしんねえ、さつきからぐ
うぐう高いびきできさ。

捻兵衛 起こせ。すぐ起こしなさい。

源 八 へえ（ト、長屋の中へ）

捻兵衛 長さん、あんたはすぐに吉原へ行つて、若旦那を探してきとくれッ。

お 糸 なんだよ、急にドタバタしやがつて。わけわかんねえ。

捻兵衛 邪魔なんだよ、おめえはッ。

捻兵衛 長さん、急いどくれ。吉原の竹村伊勢だ。いや、豆腐の山屋かしれない。

長次郎 そんな、竹だ山だつて言われても、あたしや、吉原にはほとんど不案内・・・

捻兵衛 行きやわかる。

ト、その時。

職人一 （井戸の中から）おーい。箆、上げてくれい。

職人二 おうッ。

職人二、縄をひっぱる。箆があがってくる。

職人二 錆びた櫛が一枚に、ひしゃげた耳搔きが二本。それに一文銭と波銭が一枚・

源八 こりゃあ、赤フンのきれっぱしか？

お糸 赤フンのきれっぱし？きつたねえ井戸だな。

お浜 あれ？なんだよ、これ・・やだよ。こりゃ、禪祝ごいわいの時の赤フンじゃねえか。
あれまあ、ちっさい。こりゃ捻兵衛さんのだよ。

捻兵衛 え？

お浜 ほら、あんたが十三時にサ、うちのおとつあんが禪親へこおやになつてサ。あん時、あんたが使った禪だよ、これ。けど、なんでこんなもんが・・

捻兵衛 よ、よしねえ、つまらねえ。

捻兵衛、禪の布つきれをひったくり、隅の方へ。

こっそり見つめる。

源八 (長屋から出てきて) 親方、起きませんや(箆を覗いて) へえ、ずいぶん浚っ

てきたもんだね。この波銭はおれんだな。昨日、落とした。

長次郎 嘘こけ。

箆の中をさぐる源八、長次郎、お浜、お糸。

職人二、ボロ布を広げて浚ってきたものを並べはじめる。

お糸、中から、紅板べにいたを見つける。

お糸 ?・・!?

お浜 どうかしたかい？

お糸 え・・べ、別段、どうもしやしないよ（紅板をこっさり懐にしまう）

源八 もう、金目のもんはねえのかあ？ ったく、井戸までしみたれてやがら。

お浜 そういう口をきくと、井戸神様の罰があたるとよ。

源八 なんです？ その井戸神様ってのは。

捻兵衛 おいおい、井戸ン中のゴミなんざ、どうでもいいよ。それよか、お浜さん、藤吉さんを起こしておくれ。長さんは、若旦那を。

源八 （箆をかき回していたが）？ ・・わあッ！

お浜 な、なんだよ。びっくりするじゃないか。

源八 こ、こ、これ・・あにき、こ、これ！

長次郎 え？ ・・わッ、ゆ、ゆび！

捻兵衛 なに!? （ト、見て）！ ・・こ、こりや、指だ！

皆な ええ!!

捻兵衛 こりやあ、間違いなく人の指、小指だ。

長次郎 大家さん。その、そりや、昨日、大家さんが言ってた（ト、あわあわしながら空店（い）を指し） ・ ・ ・ そ、その竈にで、出るって話だったんじゃないんですか。それが、な、なんで、井戸から ・ ・ ・ 。

職人二 （さつきからガタガタ震えていた）か、勘弁しちくれよ。お、おりやあ、生もんじゃ弱いんだ。腹くだしちまうんだよおお。

藤吉 （起きてきていて、職人二の背後から）食えとは言ってねえ。

職人二 うわッ。お、おどかすねえッ。か、頭呼んでくらあッ。

職人二、脱兎のごとく去る。

長次郎 お、大家さん、そ、その指、う、動きまわるんで？ ってことは、あっちいっ

たりこつちいたり、あつしの長屋の方にも・・・。

長次郎、はっとして、自分の長屋に走り戻ると、風呂敷を広げ荷物をまとめだす。

源八 あにきッ。なにやってんだよ。

長次郎 俺は出てく。祟られないうちにおめえも出てったがいいぞ。

長次郎、そそくさと木戸口方向へ。

源八 待てよ、あにき。まだ、押入れの中に商売道具が残ってるよ。

長次郎 へ？・・・よく気づいた。

長次郎、押入れをがらりとあける・・・が、中にはなにもない。

長次郎 おいッ、ここにしまっておいた枕本はどうした？

源八 え？

長次郎 二十四文の枕本だよ。あー、お、おめえッ（ト、源八の胸ぐらをつかむ）し、しらねえよッ。ちゃんと探せよ、あにきはようッ。

長次郎、はいつくばって押入れの奥へ入り・・・

長次郎 ああッ!?こ、こんなところに抜け穴があるッ。

源八 抜け穴!?

お糸 !

捨兵衛 …… なんだと!?

お浜・藤吉 …… え!?

お糸をのぞく皆な、長次郎の長屋の方へ集まってくる。

お糸は、しまったという表情で立ち去ろうとする・・・が、井戸が
気になる様子で、そっと覗き込む。

捨兵衛 …… どのとくれッ。

ト、源八、長次郎を押し退けて、押入れに入り込み ……

真ッ赤に怒って出てくる。

長次郎 …… お、大家さんッ。

捨兵衛 …… お糸ッ。

お糸 …… (はっとしてあわてて逃げようとする)

捨兵衛、お糸の襟首をひつつかまえる。

お糸 …… なにすんだよッ。

捨兵衛 …… 押入れン奥に抜け穴あけやがって。向こうはおめえんちの庭だ。

お糸 …… それがどうしたい。

一同 …… ええーッ!?

捨兵衛 …… おめえだなッ。ずっと先っから、この店に空き巣に入りやがってたのはッ。
自身番に来いッ。

お糸 …… 自身番だと?へんッ、そりゃいい。そんじゃ、こっちは、てめえが中間部屋

に入り浸ってること、洗いざらいしゃべってやろうじゃねえか。

源 八 中間部屋って、大家さん、博打を!?

藤 吉 だけえ声を出すな。

お 糸 こいつが人に借りた金を返さねえのがいけねえんだろ。大家と言やあ親とおんなし、店子は子供。親の借金を子供に払ってもらったまでのことだよッ。

捻兵衛 な、な、なんだと!?

お 糸 あたいを自身番につれてくってんならいきやがれ。てめえを地主に突き出してからなら、喜んで行ってやら。へん、ざまーみやがれッ。

長次郎 (つかつかとお糸に歩み寄り) あたしの本を返しておくれ。あれがなけりや商売あがったりだ。

お 糸 おッ。なんだよ、急に鎮まりやがって。さっきまでビクついてた野郎がよ。

長次郎 あの枕本には、たいそうな元手がかかってるんだよ。二十四文で貸したって十人がとこ回さなきやモトがとれねえんだ。十人回る間にや破けもするだろうから、修繕の糊代が一回二文としたって、三回治せば・

源 八 あにき、言うことがせせっこましいんだよ。

長次郎 そ、そりゃあ、大家と店子は親子とおんなしだが、あたしは昨日引っ越してきたばかりなんだ。まだ親子どころか“おや?”にもなっちゃいねえ“お?”くらいの間柄なんだ。そこんところは・

お 糸 なにわけわかんねえこと言ってんだよッ。

長次郎 とにかく返しておくれ。あたしや、この長屋を出ていくんだから。もうこの人(捻兵衛)とは縁を切った。親でもなきや子でもないんだから。

藤 吉 待ちやがれッ。

一同、びくつとする。

藤吉 どいつもこいつも・・・捻兵衛のどこが悪いつてんだッ。

お浜 と、藤吉さん。

藤吉 博打打ちは盗人よか悪いのか。情け知らずの店子に、後ろ足で砂かけられなきやいけねえつてのかッ。

お浜 そうだよ。博打つたつて、捻兵衛さんのは、ほんの小博打さ。それも騙されたのさ。あたしや知ってるんだ・・・この人はね、ちっさい頃から運に見放された人だったんだよ。元々、風体もここ（頭）も、あんまし出来がいいとはいえない人でサ、それでも十三の時から馬喰町の旅籠屋に小僧に入ってサ、けど、仕事はきつい、飯は不味いは、銭もない。女にやもてない、背は縮む。ち、縮みやしないよッ。

藤吉 魔が差したと言やあそれまでだが、ふと手を染めた博打、てなくさみ丁も半も知らなくて、ただきよろきよるとあたりを見回し

捻兵衛 はん？はん？はん？

藤吉 と、尋ねるうちに、これが全部大当たり。思えば、あん時に、運を全部使い果たしちまったんだなあ、捻兵衛さんよ。

捻兵衛 藤吉さん・・・。

藤吉 けどよ、おれたちにとつちやあ、あんたは大事な大家さんだ。あまりもみてえなおれたちの身過ぎ世過ぎを、あんたはいつだって面倒みてくれる。

お浜 そうだよ。地主との間に入っていつもかばってくれている。店賃だつて、うちはもう一年がとこ、捻兵衛さんにたてかえてもらってるのさ。

藤吉 おれなんか、最後に払ったのがいつだったかも忘れちゃったよ。

長次郎 そうなんですか？

藤吉 おめえらはちゃんと払え。

お浜 そうだよ。これ以上、捻兵衛さんに迷惑かけらんない・・・捻兵衛さん？

捻兵衛 あたしや、この世にぼろりと生まれ出たものの、役にたったことなんかただ

のいっぺんもなかったんだよ。それだもんだから、こんな歳になって、ちつとでも人ンためになりや、冥利にあずかれつかしんねえなんてケチな根性をおこしちまって・・・町役ちやうやくなんぞをつとめちやいるが、蓋をあけりやこの様だ。へへ、面目ねえこった。勘弁しちくれ、藤吉さん、お浜さん（頭を下げる）やだよお、捨兵衛さん・・・。

藤吉 （お糸に）おい、裏の性悪女。どうでも捨兵衛を家主に突き出すってんなら、おれを突き飛ばしてからいきやがれ（ト、捨兵衛の前に胡座をかく）

源八 親方、腰・・・。

藤吉 なに？腰だ？こちとら、船頭で鍛えた体よ。そう簡単にガタついてたまるか。
お糸 （藤吉を穴のあくほど見つめている）

藤吉 なんだ？おれの面がそんなにめずらしいか。

お糸 せんだう・・・。

藤吉 あー？

お糸 あんた・・・もしかして・・・あん時の・・・船頭さんじゃないかい？

藤吉 ああ？

お糸 十三の時、あたしが、神奈川の在から品川の宿に売られていった時に・・・あたしを乗せて・・・（懐から紅板を取り出し）これを・・・。

源八 あれ。それ、さつき井戸から浚った・・・

お糸 紅勘べにかんの紅板だよ。

お浜 紅勘って、そんなたいそうな紅をつける女は、この長屋にや・・・（見て）なんだよ、えらく古いじゃないか。さびてるよ。

お糸 そりやそうさ。二十五年前のものだもの。

お浜 え・・・？

お糸 （藤吉をまっすぐ見つめ）イロに買ってやったんだが、はなむけにやるぜ。これ塗って、早く一人前になってしっかり稼ぎな。しっかり稼せぎや、それ

だけ早くおとつあんとおつかさんとこに戻ってこられるからな・・って。

藤吉 ?

お糸 二十五年も昔のことだけど、あたし、あの時のことだけは忘れたことなかったんだ。あんた、あん時の・・

お浜 藤吉さん、あんた、お糸さんと前っからの知り合いだったの？

藤吉 インヤ。あいにく、おれはまるつきし覚えちゃいねえ。

お糸 あんた、あたしにこれをくれたんだよ。あたし、どんなにか嬉しかったか。

一同、顔をみあわせる。

お浜 けど、なんでそんな紅板が、あの井戸から？

一同、井戸を振り返る。

ト、井戸の中から声。

職人一 おーい、あげてくれえーッ。

お浜 しまった。まだ、職人がひとり井戸中だよッ。

源八 相方はどうした。置いて帰っちまいやがったのか、あのやろう。

捻兵衛 あげてやらなきや。

藤吉 (長次郎に) 手を貸せ。

長次郎 や、嫌だよ。こんだ、なにがあがってくるかわかったもんじゃねえんだから。

源八 あにきも、つくづく意気地がねえな。俺なんか、次から次とおもしれえことがおこるから、体中の血がぐるぐるまわっちまってるッ。ほら、引くんだよ。

藤吉 よしッ、いくぜ。ふんばれえッ。

掛け声とともに、藤吉、捨兵衛、お浜、長次郎、源八で縄を引く。

お糸だけは、まだ藤吉から目が放せない様子。

何度目かで、やっと、職人一の指が井戸枠にかかる。

藤吉　もうひといきだッ。それッ。

ト、一番井戸の際でひっぱっていた捨兵衛

捨兵衛　（突然）あ、指ッ。そういや、あの指、どうした!?（ト、手を放す）

藤吉　あー?（手を放す）

ドドッと井戸の方に引っ張られる縄。

お浜

長次郎　うわああ〜（ト、つんのめる）

源八

職人一、井戸に転落し「うわああ〜」

皆な、井戸の中を覗く。

藤吉　おいッ無事かッ!?

ト、そこへ

職人二　てえへんだッ。永代の垢離場こりばに土左衛門があがった。じじいと小指のねえ女

ンだ！

一同

!?

暗転。

七夕のうたが聞こえてくる。

♪ 笹竹流しよ 笹竹流しよ

星逢いの空 雲のうえ

どうぞ みさせてくださいゃんせ

笹竹流しよ 笹竹流しよ

月の御船みふねを のぼり瀬に

どうぞ はこんでくださいゃんせ

笹竹流しよ 笹竹流しよ

かささぎの橋 たまの橋

どうぞ わたしてくださいゃんせ

宵五ツ頃。

夜空には、星がぼつぼつ姿をあらわしている。

笹竹は、軒に立てかけられてあり、流されるのをまっている。

長屋の井戸の上方、空に橋がかかる。

そこに腰かけている扇太郎とお由。

お由

若旦那。わっちは若旦那が、いっち好きぎます。ずうっと先から、いっち好きでありました。

扇太郎 よし霞。その話は十年前にも、聞かなかったことにすると言ったはずだよ。

お由 ……あい。

扇太郎 お前と藤吉がどうしても一緒になりたいと言うから、あたしはお前さんたちのために一芝居うったというのに。あたしの苦労は水の泡だったのかい。

お由 わっちは藤吉さんの無二無三むにむさんに負けいいした。

扇太郎 それそうだろう。あの男は、お前を待ち続け、お前だって、やっと年季をとめあげ、そうしてやっと一緒になれたのだ。

お由 それはそうでありいすけど……。

扇太郎 十年前の八幡祭りの時のお前の言いぐさといったら、あたしは本当に肝を冷やしたよ。

お由 それでも、あれが、あっちの実ぎます。だから、あっちは指を切りいした。

藤吉さんのおかみさんになりいしても、あっちの心は若旦那のものと。

扇太郎 (ため息)

お由 吉原では、何度も指を切りいしたが、まことに切りいしたことはありません。いつもしんこ細工ぎます。

扇太郎 あたしは、ほんとうに弱ったよ。

お由 それで、若旦那は、あっちの指を捨てなんしたか。

扇太郎 お前には悪いとおもったが、あの日、すぐに大川に捨てたよ。お浜の手前、持っているわけにもいかないだろう。まさかそのあと、お前が永代であんなことになるうとはおもいもしなかったからねえ。

お由 大川におちたら、見覚えのある小指こよびが、ふうらふうらと浮いてきいしたので、ほんにあきれけえりやんした。あんまりあきれて、ぼんやりしているうちに、小指は海の方へ流れていきいした。あれからどこへいったやら。

扇太郎 とつくに、魚の腹の中だろうよ。

お由 若旦那は、意地の悪いことをいいなんす。

扇太郎 お前が無茶をするから、あたしだって皮肉を言うよ。

お 由 若旦那・・・あちきはなにも、若旦那に添うてくれとはいいいせん。

扇太郎 それならなぜ、あたしの長屋なんぞに、現れた？

お 由 ……小指だけでありいす。

扇太郎 それでも、あれのせいで、大家はおおきに迷惑をした。

お 由 あつちは、若旦那が恋しくて恋しくて、一刻も早くに、おめもじしたくてなりいせんでした。それでも、あつちらが浮世にお邪魔できいすかわたれ時には、若旦那のそばにはいつもお浜さんがいんして、離れる時もありいせん。わっちや、いつそお浜さんがにくらしいぎます。

扇太郎 お浜をにくくおもうのはおかどちがだよ。

お 由 それでも、あつちは若旦那をすいておりいすもの。

扇太郎 藤吉は、今でも、お前を待っているのだよ。どうするのたえ？

お 由 若旦那から、あつちがいつちすきなのは若旦那と、伝えてくんままし。

扇太郎 そんなことが言えるものかい。

お 由 それでも・・・どうか・・・おがみいす。

扇太郎 いやだよ。それにもう言いたくても言えやしない。お前があたしを大川にひきずりこんだのだから。もう、なにもかにも、おしまいだよ。

お 由 そうでありいしたねえ。ふふふ。

扇太郎 なにがおかしい。

お 由 おかしいのではありません。なにやら、あちきはうれしくて・・・おかたじけえ、若旦那。

扇太郎 まったくお前の言うことは、なにからなにまで気がぬける・・・よし霞。

お 由 あい。

扇太郎 あの世とはどんなところたえ？

お 由 あい、ご案内いたしんすよ。もう十年もすんでいるざます。知る^し辺^べも多くな

りいした。若旦那に不自由はかけいせん。

扇太郎 そりゃありがたいこった。

お由 若旦那。

扇太郎 なんだい。

お由 あちきに、癪かんをたていいしたか？

扇太郎 ・・・あたしはもう、なにも感じなければ、なにもおもわない・・・あたしは・・・よし霞、まったく、おめえに殺されたね・・・。

お由 若旦那。

扇太郎 なんだい。

お由 よい七夕祭りになりいした。

星空を見上げるお由。

苦笑う扇太郎。

藤吉の長屋。

座敷に早桶がひとつ（お由）、その隣りに扇太郎の亡骸、こちらの方は早桶がまだ間に合わず、屏風が立てられてある。

その前に座っているお浜と捨兵衛。

座敷の隅っこで正座してる長次郎と源八。

土間にすわり込んでいる藤吉。

同じく土間にしゃがみこんでいるお糸。

土間には作りかけの早桶がひとつ。

線香の煙がつうーつとたちのぼる・・・。

お糸 とんでもない七夕祭りになっちゃった・・・。

捨兵衛 不思議なこともあるもんだねえ。十年前に大川に沈んだはずのお由さんの亡

骸が、まるでさつき死んだような様子で浮かび上がってくるなんて。若旦那もお由さんも、まるで眠ってるみたいな顔だったじゃあないか。

お糸 不思議なのは、そればかりじゃないさ……。

長次郎 井戸替えの時に、なくしたものが出てくるってのは、よく聞く話だが、年代物が上がってくるってのはねえ。その上、人の指まで出てきたひにゃあ、たまったもんじゃねえ。

藤吉 お由は……お由は、なんだって、おれを大川にひっぱりこまなかつたんでえ。藤吉さん。

お糸 用心すりやよかつたんだよ。またいつもの若旦那のとんちんかんだなんて、受け流さないで。

お浜 うっ……。

お糸 竹村伊勢に行くって聞いた時、ピンとこなきやいけなかつたんだよ。

お浜 ううっ……。

長次郎 大家さん。あの……小指……どうしたんで？

掬兵衛 もとの通りに戻して、さらしで巻いてやったよ。

長次郎 そうですか……。

掬兵衛 けど、おかしいね。お由さんは藤吉さんと一緒になった時には、ちゃんと小指があった。そうだよね、藤吉さん。

藤吉 (頷く)

掬兵衛 まったく不思議なことだらけだ。あたしにはなにがなんだか、さっぱりわからないよ。

長次郎 お由さんは、若旦那に実を見せたかったんじゃないですかねえ。

藤吉・お浜 え？

掬兵衛 そりゃ、どういう意味だい、長さん。

源八 あにき、いい加減なことを言っちゃあ……

長次郎 いいかげんじゃねえよ・（懐から読本を取り出す）若旦那が書いた本だ。

一同 え・・・。

長次郎 大見世の花魁と船頭が相惚れになる話。

源八 ああ、それ・

長次郎 おめえは泣本なんて茶にして、たいして読んでもいねえだろうがな。（捻兵衛に）素人作者が書いた本で、これ一冊きりつきやない。もうボロボロだから、そろそろお払い箱にしようとしてたやつでサ。

捻兵衛 それを、若旦那が書いたってのかい。

長次郎 （頷いて）作者は扇豆腐。

捻兵衛 おうぎのとうふ？

長次郎 小野道風のもじりでしょうかね。扇は扇太郎の扇の字。豆腐は

藤吉 若旦那だ。まちげえねえ。あの人ア、豆腐が大の好物なんだから。

藤吉、本をひったくり必死で読もうとする。

藤吉 （読めない。つぶやく）くそ・・・。

お浜 見せとくれッ（ト、手にとるが）・・・だめだ。唐文字からもしがまじってら・・・。

藤吉 やっぱり若旦那は、本を書いたことがあったんだな・・・。

お浜 やっぱりって？

藤吉 源八から話のさわりを聞いた時によ、おりゃあ、なんだかピンときて、若旦那に聞いてみたんだよ、泣本なきほんてのを知ってるかって。

お浜 そしたら？

藤吉 知ってるといいなすった。けど、書いたことはねえと。

長次郎 藤吉さんとお由さんのなれそめから若旦那が一芝居うったこと、そっくり書

いてありやすよ。ただ、お浜さんも藤吉さんも知らなかったこと、実は、お由さんは若旦那に惚れていて、しきりに口説いていた・・それも書いてある。

藤吉 お由が若旦那を？

お浜 そ、そんなことがあるもんか。お由さんと藤吉さんは所帯をもつために、そりゃあ、働いて働いて・・・

捻兵衛 そうだよ。ふたりはそりゃあもう・・

藤吉 お由が若旦那に惚れてた・・・。

捻兵衛 なにかの間違いだよ。そりゃあ、若旦那のつくり話だ。読本よみほん書きというのは、いろいろとこう、話をおもしろおかしく作るもんなんだろう、長さん。

長次郎 そういうこともありましようが・・・。

藤吉 ・・・お由のやつ、この長屋を出ようと言ったら、嫌だといいやがった。おれの商いも忙しくなってきた、ここじゃあ手狭だから、別のところへうつろうと言ったら、あいつはどうでも嫌だと言った。今からおもえば、ありゃあ、若旦那と離れたくなかったからじゃあ・・・

捻兵衛 なにを言うんだよ、藤吉さん。お由さんはお前さんに心底惚れて・・

藤吉 それならなんで、若旦那を大川にひっぱった？おれじゃなく、どうして若旦那をあつちに連れていきやがったんだよッ。

お糸 言うとおりの・・だ。

藤吉 おれはお由を待っていた。一年、二年、三年・・あいつがあがってくるのを待っていた。かわいそうに、暗い川の底で、さむかないか、さみしくないか。

あいつは、おんもりした女だから、まわりのやつに「お先い、どうぞ」なんてゆずってやってるんじゃないか。それとも、女にしては、大柄なやつだったから、浮かび上がりたくても浮かび上がれねえのか。けど、あいつが大川からあがってきさえすりゃあ、もうひとりにやさせねえ。おれが一緒に桶、入って、こんどこそあつちの世へ・・・そう思っていたのよ・・・。それが、

なんで若旦那だ？

捻兵衛 藤吉さん。

藤吉 いや、若旦那を恨んでるんじゃないねえ。おれは若旦那を恨んじやいねえ。俺は若旦那にすまねえ。しんから、すまねえ。

お糸 あ・・あんたは・・

藤吉 勘弁してくださいせえ、若旦那。お由のしでかしたことを、どうか・・。

お浜 (藤吉につかみかかり) なにがすまねえだッ。女房をとられて、なにが勘弁してくれだッ。おまえがそんな腰抜けだから、若旦那は、お由なんかにつばられちまったんだよッ。

お糸 (お浜を突き飛ばして) よしねえ、みつともねえッ。いっとう辛えのは、この人だつてのがわかんねえのかよッ。

お浜 くやしくやしくやしい(泣き伏す)。

お糸 泣くねえ、埒もねえ。あの歳になって、女郎の未練にひっぱられてあつちもんなになつちまうなんて、粹な若旦那らしいじゃねえか。女房なら、意地をお見せよ、お浜さん。

お浜 (号泣する)

捻兵衛 お泣き、お浜さん。おもいきりお泣き。おもいきり泣いたら寝ちまうんだ。

それがつらい時の一番の養生だよ。

お浜 (頷きながら、ひきつけをおこしたように泣きだす)

捻兵衛 大丈夫かい、お浜さん(お浜の肩を抱いて) 悪いが、お浜さんを少しやすませてもらおうよ。このままここに置いといたら、この人まで死んじまう。

藤吉 ・・線香は絶やさねえようにする・・。

捻兵衛 たのんだよ。

捻兵衛、お浜の肩を抱いて、扇太郎の長屋へ。

長次郎 (本を藤吉に差し出して) 読んでやってくだせえ。若旦那の形見物だ。

藤吉 (ぶいと背を向ける)

源八 親方は、親の遺言で文字はお読みにならねえことにしてなさるんだ。

長次郎 あ……。

源八 (読本を手にとって) 『江戸生まれおからの胡麻和え』・京伝先生のもじ

りかよ。もつとも、あつちは鰻の蒲焼きだが、こつちはおからの胡麻和えか。

しみじみ貧乏つ臭え。

長次郎 おからにおけらを掛けてるのよ。主人公は艶二郎ならぬ無一文の扇太郎さ。

源八 へええ……滑稽本か？

長次郎 初めて読んだ時は笑い転げたが……。そりゃあ、おめえは鼻で笑うだろう

が……今となつちゃあ、泣本だぜ、源の字。

源八 あにき……。

長屋の明かりおちる。

七夕の歌が小さく聞こえる。

溶暗。

木戸口方向より三平、笹竹を数本担いでやってくる。

後ろからおみつ。

おみつ 三平。

三平 ねっちゃ。

おみつ だごいぐだよ。

三平 笹竹、川に流しにいぐだ。たのまれたんだべ。ねっちゃこそ、こんな遅くになにしてるだよ。

おみつ おっしょさん、お通夜からもどつてこなぐつてよ。

三平 そんだったら、留守番せねばだめでねえが。

おみつ んだけど、なーんだかひとりでいるときみしいっちゅうか・・なあ、三平。
(短冊を触って) 七夕さんは、ほんとに願い事サ、かなえてくれるんだべか。

三平 (星空を仰いで) どうだべかなあ・・ねっちゃ。

おみつ ん？

三平 お浜さんどごのじつさま死んじまっただなあ。

おみつ んだなあ・・(星空を仰いで) 三平・・。

三平 んー？

おみつ 牽牛と織り姫は自分たちばっか、イチャづいで、おらだちのこと忘れてねえが？

三平 どうだかなあ。

おみつ (星空を殴って) こんにやろこんにやろ。やい、顔貸せ。殴っちゃるツ。

三平 人の恋路サ、邪魔するでねえだよ(欠伸。歩きだして) ねっちゃも、はやいとこ、家サけえって寝れ(去る)

おみつ え・・ひとりサ、しねーでよ、三平エー(慌てて後を追う)

ぼんやり明かり入ると、お糸、藤吉の長屋から出てくる。

お糸、軒に立てかけてある笹竹をかかえ井戸の方へ。

掬兵衛、扇太郎の長屋から手桶を持って出てき、二人、目があう。

お糸 (扇太郎の長屋を見て) 眠ったのかい？

掬兵衛 ああ。

お糸 これ、流しにいかないとね。おおきに、遅くなっちゃったけど。

掬兵衛 毎年、若旦那がやってくれてたんだがな・・。

お糸 ねえ・・・あなたに貸した二両、棒引きにするよ。

捻兵衛 え？

お糸 家財道具まで十の字の尻をまげちゃあ、地主にも怪しまれるよ。

捻兵衛 なんでもお見通しか。

お糸 棒引きにするかわりに・・・店子に返してやってくれるかい。

捻兵衛 返すって・・・。

お糸 その・・・あたしがなにした銭をさ。

捻兵衛 お糸さん。

お糸 へへへ。なんだろうねえ。急にまともになってみたくなくてさ。

捻兵衛 そういわれても、出ていった店子の居所が皆なわかるわけじゃないしね。

お糸 わかってるやつにだけでもいいから。

捻兵衛 それはいいが・・・。あなたがちよろまかした金は二両にはならねえよ。せ

いぜい、三分くらいだ。

お糸 いいさ。

捻兵衛 本当にいいのかい？

お糸 いいんだよ。それにしてもさあ、大家さん。あんたもあたしも、おたがいい

い歳をして独り身つてのがいけねえのかな。なんだかへんに寂しくって、つ

まらねえことをしちまう。

捻兵衛 そうだな・・・。

捻兵衛、井戸の蓋をとって水を汲む。

お糸 ・・・・。

捻兵衛 お浜さんがぐっしより汗をかいてね。

お糸 ふうん・・・。

お糸、ふっと井戸を覗く。

お糸
きれえッ。

捻兵衛
え？

お糸
お星さまが写って、きらきら光ってるよ・・・うらやましいね、こんなきれいな水で拭いてもらえるなんてサ。そんなじゃ、流してくるよ。三途の川まで流れつきや、あとは若旦那がどうともするだろう。

お糸、笹竹を肩に背負い、路地方向へ。

捻兵衛、井戸を覗く。

捻兵衛
お由さんの小指に、お糸さんの紅板。そこから（懐から赤い布切れをとりだし）俺の禪祝いん時の赤ふん・・・（慌ててしまつて）いやいや、こんなもんは隠しておかにやらねえ。みつともなくつていけねえや。それにしても、井戸神様は、いったいどういう気なんだろうかねえ・・・。

捻兵衛、お浜のところに戻り、手桶の水に手拭いを浸し額にのせてやる。

星が瞬く。

扇太郎の長屋の屋根に明かり。

扇太郎が、笹竹を担いでいる。

扇太郎
暑気あたりなすったかね、井戸神様は。それにしても、井戸が大川に繋がってるわけはあるまいし、その大川が三途の川に流れこんでるなんてのも聞い

たことがないが・・・こりや、確かに、あたしがつくった七夕飾りだねえ。

藤吉の長屋に明かり。新しい早桶のたがを打っている。

藤吉

七夕ってえのは、年に一度、牽牛と織り姫が逢う晩じゃねえのかい・・・(コンッ、コンッ)俺あ、生涯、七夕祭りなんぞはやらねえ、そう決めた(コンッ)。若旦那、若旦那とお由を一緒の桶に入れるわけにはいかねえんで。そりや、お由は一緒に入りてえかしらねえが・・・あいつと一緒に桶に入るのはあつしときめてましたんで・・・。そのつくれえのことは勘弁してもらわねえと(たががはずれる)けッ・・・(槌を放り)俺の性根のたがもはずれっちまったぜ(酒をあおる)

捻兵衛

(お浜をしみじみ眺めながら)はずれっぱなしの浮世だったよ。あたしは生まれ時から運に見放された男だが、あんたは、ずいぶんと骨を折つたのに、最後に大きくはずれちまったねえ。どうするんだい、これから先。

扇太郎

先のこたあ知らねえし、昨夜のこたあ忘れたと、世辞でまるめて浮気で捏ねる。その上、生まれついで能天気。明るけりや月夜とおもい、起きていながら寝言言い、お浜にたいそう苦勞をかけた。お浜は、とんだいい女だが、恋は意外の正無事。よし霞にゃあ負けやした。今度の今度は、さすがのあたしも、ここが往生所とあきらめきった。

藤吉

きったはったはとうの昔、猪牙で風切る大川端に、棹で突き刺し置いてきた。そうしてやっと手に入れた女にされたこの仕打ち。漕ぎだそうにも棹はなし、空家で棒をふるような、間抜けな俺のこの浮生。

藤吉、とっくりを手に表に出て来て床几に座り、酒を煽る。

扇太郎の長屋の戸をそうつと開けて出てくる捻兵衛。

中からお浜の大きな髷。

捻兵衛、思わずびくつと振り返る。

捻兵衛

（そおつと戸を閉め）生き残り・・・幼なじみが 高いびき・・・生きたくもあり生きたくもなし・・・（ため息をつく）

扇太郎

（身を乗り出し）冥土から ながめる長屋の おもしろさ。生きたくもあり、生きたくもなし（しやがみこんで捻兵衛を覗き、ふつと笑う）

藤吉

（星空を仰ぎ）七夕や・・・やれ七夕や七夕や（酒を煽る）生きたくもあり・・・
星空を仰ぐ扇太郎。

扇太郎

生きたくもなし。

七夕のうた、聞こえてくる・・・。

星空を仰ぐ捻兵衛・・・。

溶暗。

夜空、いちめんに星があらわれて・・・いくつか流れる。

路地方向から、お糸、やってくる。

夜四ツ（午後十時頃）。

お糸、藤吉の長屋の前まで来て

お糸 …… 藤吉さん・藤吉さん・…。船頭さん・…。

しいんとしている。

お糸、紅板をじつと握りしめ、表戸に手をかけると・…開く。

藤吉の長屋にぼんやりと明かり入る。

線香の煙が一筋たっている。

土間の隅っこで、うずくまるようにし泥酔して寝入っている藤吉。

お糸 …… 船頭さん。

藤吉 (微かに動く)

お糸 こんなところで寝入っちゃったらいけねえよ。上がんなね。

藤吉 (目がさめて、お糸を見る)

お糸、照れて、藤吉に背を向け、土間にしゃがむ。

お糸 あれ(線香)、絶えさしちやいけねえとおもってサ。

藤吉、ちらと見るが、まだ線香が燃えているので、上がろうとせ

ず、土間に座りなおす。

お糸 (藤吉の方をむかないまま) あのサ、これ(紅板)サ、大事にしたのにサ、

品川の河童天王かっぱてんのうの祭りまつりで、神輿かみこが海に入るのを見物みぶつに行った時にサ、なくし

ちまったんだよ。品川の宿しゆくで、坊主ぼくしゆやら田舎侍いんげざむらいやら、いけすかない客きやくの相手

しなきゃなんねえ時もね、これをながめちゃあ、船頭ふねづかさんのことを思い出し

てたよ。あん時、船頭ふねづかさんが、女めに買ってやったこれをあたしにくれて・…

あん時の人って、お由さん？

藤吉 ああ・・そういうことになるかな。ちょうどお由の年季が明けて、俺も船頭をやめる決心をした頃だな。

お糸 じゃあ、これは、お由さんのものなんだ、ほんとうは。

藤吉 おめえにやったんだから、おめえのものよ。

お糸 十三の小娘に紅をくれた。

藤吉 たいそうませた娘にみえたんだろうよ。

お糸 それでもうれしかったよ。ありがとう。

藤吉 ・・・いい頃だったな・・。おめえも俺も。まだ。

お糸 ・・・。

藤吉 けど、おめえはたいしたもんだな。いい旦那をめぐって、仕舞屋住まいといえれえ出世だ。まあ、ちっと手癖は悪いらしいがな。

お糸 それは言わないでおくれよ。大家さんに頼んで、償^{つぐな}ってもらうことにしたんだから。

藤吉 そりゃいい心掛けだな。

お糸 ・・あんなのおかげ。

藤吉 あ？

お糸 あたしやずうっと、性根のくさった女だったんだよ。十三ン時から二十五年。手練手管は女郎のおきまりだけどサ、仲間の客取ったり、毘にはめたり。客だって、しみつたれで因^{いんしょう}業な女を引き受けるほど馬鹿じゃない。いい旦那なんてつかなかったよ。そうなると余計、意地になってさ、金をため込むのだけ頼りになって・・。それが、今朝、この紅板が井戸から出てきた時、憑き物がおちたみたいに・・あたしや、十三の時の自分に戻ったような気がしたんだよ。

藤吉 そうか・・（紅板を手にとって）河童天王ン時に落とした紅板がなあ・・。

河童が目黒川から海を泳いで、深川に運んでくれたか。

お糸 河童が縁結びじゃ色気がないね。

藤吉 縁結び？

お糸 あんたとあたしの・・・さ。

藤吉 ……。(くるりと背をむける)

お糸 ねえ、船頭さん。こんな時になんだけれど・・・あたしを・・・あたしをも一度、真人間まにんげんにしてくれないかい・・・。

藤吉 おめえはもう、ちゃんとてめえで真人間になってるじゃねえか。

お糸 あたしや、船頭さんにしてもらいたいんだ。二十五年前のあたしにしてもらいたいんだ。

藤吉 (なにも言わない)

お糸 お情けをおくれよ・・・。

藤吉 (動かない)

お糸 おがむよ・・・船頭さん・・・(藤吉の肩にすがる)

お糸、藤吉の背中を強くだきしめる。

藤吉、微動だにしない。

藤吉の長屋の明かり落ちる。

捻兵衛、路地方向より、卵籠を持ってやってくる。

扇太郎の長屋の戸を開ける。

お浜 捻兵衛さん？

捻兵衛 起こしちまったかい。

お浜 ……世話かけちまったねえ。

捻兵衛 いや。

お 浜 なんだか、百年も眠ったようだよ。

捻兵衛 丸一日もたつちやいないさ。けど、よかった。少しは落ちついたかい。

お 浜 あの人・・・若旦那と、お由さん・・・

捻兵衛 藤吉さんが見ていくるから心配ないよ。

お 浜 いいや、そうじゃないんだよ。今頃、どこをほつつきあるてるのかなあと

おもってさ。牽牛と織り姫に便乗して、天の川をそぞろ歩きでもしてるのかなあ。

捻兵衛 お浜さん・・・

お 浜 捻兵衛さん。あたし、この長屋を出るよ。

捻兵衛 え。

お 浜 だって、もう若旦那はいないんだし・・・ここにいたら、いつまでも若旦那のことばかり考えちまうから。

捻兵衛 そうか・・・

お 浜 あたしや、若旦那の死に水をとってやるつもりでいたのさ。だって、それが女房のつとめだろ。それなのに、とんだところで、かつさらわれちまった。

捻兵衛 なにがおこるかわからねえのが浮世つてもんだ。ままならねえことだらけさ。悟ったふうなことを言うじゃないか。このまんまでいきやあ、あたしもあんな

たも、ひとりぼっちで、おっちんじまうんだよ。

捻兵衛 死ぬ時や、だれだってひとりだろう。

お 浜 そりやそうだけど・・・さみしくないかい。

捻兵衛 死ぬ時や、だれだってさみしいよ。

お 浜 ・・・・言うとおりだ。・・・ねえ、捻兵衛さん。

捻兵衛 ん？

お 浜 今年の井戸替えは、妙な井戸替えだったね。お由さんの指は出てくるわ、お糸さんの紅板、あんたの禪祝いの赤フンまで。井戸神様もシャレがきついよ。

捨兵衛　なあ、お浜さん。

お浜　ん？

捨兵衛　ここを出るのはいいが、そのあと、どこへ行くんだい。

お浜　そうだねえ。

捨兵衛　お前さん、行くところなんかどこにもありやしないだろう。

お浜　・・・照降町にでも行こうか・・・どうだい、捨兵衛さん。

捨兵衛　どうだいって・・・そりゃ、お浜さん、その・・・

お浜　幼なじみのよしみでサ、つきあっておくれよ。

捨兵衛　つきあうって・・・蕎麦食いにいくんじゃあるまいし。

お浜　（ガバツと起きて）つれあいになっておくれと言ってるんじゃないかッ。

捨兵衛　お、お浜さん・・・

お浜　女に言わせやがってッ。そういうところが、あんたはグズなんだよッ。つれ

あいになるのかならねえのか、ちゃっちゃとお答えよッ。

捨兵衛　な、なる、なるよ・・・なんだよ、中ッ腹ちゅうを並べちゃいけねえや。

お浜　（にんまりして、また寝て）ふたりで木戸番にやとつてもらってもいいし、

あんたがこのまんま、大家やってるんなら、あたしや、洗濯ばあでもやるよ。こんだ、銭とるがね。

捨兵衛、ちよつと鼻をすすって、竈のところまで行き、火を吹く。

お浜　なにしてんだよ。まだ火、おとしてなかったのかい。

捨兵衛　目がさめたら腹がへってるだろうとおもってよ。にゅうめんでも食うかい。

お浜　やだよ、そんな気色の悪いもん。

捨兵衛、竈の脇の籠から卵を取り出す。

捻兵衛 ……お浜・…ちゃん。……たまごのふわふわ…

お浜 ?

捻兵衛 たまごのふわふわを作ってやろうか。

お浜 え？

捻兵衛 精をつけてやろうと思つてさ。持ってきた（卵を差し出し）どうだい？

お浜 いいねえ。作ってくれるのかい（起き上がり）出汁昆布は、棚の上だよ。煮

干しはね・…

捻兵衛 寝てろつて。

お浜 ・…ふふふ。たまごのふわふわ・…（鼻をすする）

捻兵衛 たまごのふわふわ・…へへへ（鼻をすする）

卵のふわふわをつくり始める捻兵衛。

布団に座つてそれを幸せそうに眺めるお浜。

明かりおちる。

按摩の笛、夜鷹蕎麦の声…

空店（い）の日めくりに明かり。

はらりと一枚おちて…文月八日。

藤吉の長屋からお糸が飛び出してくる。

お糸 船頭さんッ（探す）船頭さんッ…藤吉さんッ！

長次郎の長屋から、源八と長次郎が目をこすりながら出てくる。

源八 なんの騒ぎでえ？こんな時分に。

お糸 船頭さんが・藤吉さんがいないんだよッ。

長次郎 なんだって!?

暗転。

空店(い)の日めくり、はらはらとこぼれる。一枚、二枚・・・。

物売りの声(午前)

藤吉の長屋から、おみつの声。

おみつ おっしよさん、お荷物はこれで全部です(出てきて)・・・そんじや、おっしよ

さん(頭をさげて) お世話になりました。どうか、おっしよさんもお達者で

(ト、表戸をしめ) はあ・・・しつかしなあ、おっしよさんも物好きだべよな

あ。こげなきつたねえ長屋にわざわざ引越してくるとはなあ(見回す)

小鳥の鳴く声。

おみつ 三平も急にクニさ、けえつちまったし・・・これからどうすべえなあ・・・(ふ

と、塀に目がいき) あんれえ? あんなどこから光さへえって(ト、近づく)

塀の穴に押込められていた石ころは今はなく、薄暗い塀の穴から

は向こう側からの光が一筋もれている。

おみつ、穴から覗き

おみつ ややッ、あのじっさま、こげなどこから覗いてただべか!

路地方向より源八くる。

朝湯の帰りらしく鼻唄だ。

おみつに気づき「？」となる。

おみつ

(穴から目をはなし、源人に気づき気取って) あら、朝湯ですか？ よござんすねえ。それじゃ(ト、精一杯、江戸娘を気取って木戸口方向へ去る)

くはアカニとシヤコとを両手にもてばくこれがほんとのカニシヤコもちよ

源八

!?!? 赤貝だッ(木戸口方向にすつとんでゆく)

小鳥、大いにさえずり・・・明かり落ちる。

空店(い)の日めくり、はらはらとこぼれ・・・文月十二日。

明かり入る。朝。

扇太郎の長屋に“空店”の貼り紙。

(空店(い)にも“空店”の貼り紙)

藤吉の長屋からたすき掛けをしてお糸が出てくる。

お天道様を拜むお糸。

お糸

(長次郎の長屋を開け) おはよう。洗い物あるかい？ おや、源さんはもうお

出けかい？

長次郎

ああ。ここんとこ、いやにはりきりやがってんだよ(荷を背負って) さてと。

隣りから、「やあッ」「とうッ」という掛け声が聞こえてくる。

長次郎

うるさくってかなわねえ。お糸さん、なんだって引越しまつたんだよ。

やっとうの朝稽古なんざ、覗き見してもおもしろくもなんともねえよ。

お糸

(ぷっと吹いて) おえねえやつだね。洗いもん出しといておくれよ。早くす

ましちまって草市にでかけなきゃなんないんだからね。

長次郎 草市の買いもんだったら、俺がうけあおうか。通り道だし、昼前には、いっぺん戻ってくつからよ。

お糸 そうかい。そりゃ、助かるねえ。それじゃ、真菰まこもに蓮の葉、ほうずきも買ってきておくれな。お昼、蓮飯はすめしでもこさえようかね。

長次郎 そいつあ、うれしいや。そんじゃ、行ってくるぜツ。

お糸 気つけていっといで。

長次郎、大きな荷を背負い、威勢よく路地方向へ去る。

お糸、見送り・・・開け放したままの元・藤吉の長屋をふとふり

むき、土間に入る。

そして、そこに掛けられてある槌を手にとる・・・。

木戸口方向からお浜がやってくる。

お浜 (覗いて) お糸さん。

お糸 (あわてて槌を戻す) おはよう、お浜さん。

お浜 おはよ。草市に行こうとおもってき、誘いにきたんだよ。あら、洗濯かい。

お糸 (土間の灰汁をとって) う、うん(盥と灰汁をかかえて井戸の方へ)

お浜 長さんと源公のかい。たくさん出しやがって。ま、源公の方は近々、おかみさんをもらうってえから・・・おみつちゃんだって？源八のやつ、うちの人ンどこにきて自慢しやがったよ。

お糸 自慢？

お浜 ああ。おみつは面はたいしたことねえけど、他は滅法いいなんて・・・なんのこともやらね。

お糸 あはは。

お浜 男なんてしようもないことばかり・ねえ、お糸さん・あの日つきり、藤吉さんはどこへいったかわからずじまいかい？

お糸 ・・まあ、そんなとこだ。

お浜 そうかい・・・けど、あんた・お情けはもらったんだろう。

お糸 ・・・。

お浜 お糸さん・。

お糸 (かすかに頷く)

お浜 ・・・それでよしとしなね・。

お糸 (頷く)

お浜 (洗濯物を手にとって) なんだい、長さん、まだこの手拭い使ってるのかい。しみつたれだね、あの男あ。

お糸 長さんね、いろいろ気つかってくれてね。草市の買いもんもうけあってくれた。

お浜 へーえ。けどさア、あのひと、ほんとに読本書きになれるのかねえ。

お糸 ああ、そんなこと言ってたやね。

お浜 ま、いつになることか。それじゃ、あたしは行くね。朝飯食わせなきやなんねえからさ、うちの宿六に。

お糸 ひえ、こりや朝つばらからお浜さんにあてられちまった。

お浜 おおきにおきもじさま。

お浜、木戸口方向に去る。

お糸 ・・・・・おきもじさま・か・。

お糸、お浜を見送って勢いよく井戸から水を汲む。

既にすこし汗ばんでいる額をぬぐい、空を見上げる。

M (アメリカのワルツ)

お糸「さて」ト、洗濯を始める。

物売りの声が聞こえてくる『シジミ売り』『なっとう売り』

『おはよう』のはみがき売り』等々。

お糸

(路地方向を覗きに行つて) おはよ、留さん。なんだい、その面は。え？

また喧嘩した？たいていにおしよ。その様子じゃ、相当に着物も汚したろ。

洗いもん、出しときな。ほつれもみといてやるからさ・・・あア、いいいい、

そこに置いときやいいって。それよか、薬をおつけよ。木戸番にいきや、な

んかあるだろうからさ。はい、いっといで・・・。あら、竹坊、あんた、い

つから青菜売りになつたの？・・・納豆は儲けが薄いつて、生意気をいうんじや

ないよ。菜っ葉だつて似たようなもんだろうによ。まあ、ちようどいいやね。

蓮の若菜をおいてつておくれな。ぐるつとまわつて、しまいに寄つてくれりや

いい。ほらほら、しゃんと担がないと、菜っ葉が地べたこすつてるよ。そう

そう・・・たんとお稼ぎよッ。

お糸、井戸端に戻り、再び洗濯。

暑い一日がはじまつた・・・。

幕。

星逢井戸命洗濯(単語注釈)

江戸深川冬木町(えどふかがわふゆきちょう)

現在の江東区富岡二丁目あたり。

笹竹(ささたけ)

小さい竹。七夕に用いる。

竈(へっつい)

かまど。

灰汁(あく)

灰を水に浸して取った上澄みの水。汚れ落とし、染色などに使う。

朝焼けの案配(あさやけのあんばい)

朝から酒気があって赤い顔をしている様子。

普請場(ふしんば)

建築現場。

けんつく食わされる

荒々しく叱りつけられるの意。

おこわにかけようって・・・

いっばいくわせる。ぺてんにかける。

剛の者（ごうのもの）

強く猛々しい人。

癩（しゃく）

胸部、腹部などにおこる激痛の通俗的な言い方。さしこみ。

わざとがましい

わざとらしい。

五人組（ごにんぐみ）

町々の地主、家主によって作られた隣組組織。火災、盗賊、浮浪人などの取り締まり、婚姻、相続などの世話や責任なども請け負った。

毛才六（けさいろく）

未熟な男をのしって言う語。青二才。

滅法界（めっぼうかい）

甚だしい様子。めちやくちや。途方もない。

野暮天（やぼてん）

世情に通ぜず人情の機微をわきまえない人。得に遊里の事情に通じない人を言う。

ぞろっぺえ

だらしなくしまりのない様子、またはそういう人。（関東言葉）

行李（こうり）

竹や柳で編んだつづらのようなもの。荷物を入れる。

はばかり

遠慮するの意。

糠袋（ぬかぶくろ）

糠を入れた布製の小さい袋。入浴の時、肌をこすって洗ったり、板張りのつや出しなどに用いる。

浮名（うきな）

噂。特に、男女の噂を言う。

目正月（めしょうがつ）

見て楽しいこと。

しかくばった様子

礼儀正しく几帳面な様子。

権八（ごんぱち）

居候。白井権八が幡隋院長兵衛の食客だったことから。

いつもびいびい風車（かざぐるま）

貧乏な様子の“びいびい”に玩具の“びいびい風車”を掛けて言った言葉。

割前（わりまえ）

各自の割りあて。

算段（さんだん）

手段。工夫。才覚。

積恋雪関扉（つもるこいゆきのせきのと）

歌舞伎舞踊の外題。ここでは「積もりも積もり・・・」の洒落。（※螢造語）

一九先生（いっくせんせい）

十返舎一九のこと。

中本（ちゅうほん）

大きさが読本などの半紙本と洒落本などの小本の中間の本のこと。

ここでは、滑稽本、人情本のことを言っている。

不埒なマネ（ふらちなまね）

道にそむいていること。ふとどきなこと。

紺屋のあさって（こうや）

紺屋は藍染を生業とする染物屋。

紺屋は仕事为天候に左右されるので、染物の仕上げが遅れがちで、客の催促にいつも「あさつてまでには・・・」などと言い抜けていたということから、あてにならないことを言う。

源の字（げんのじ）

源八の“源”に、あだなの意味の“字”をつけた呼び方。

不調法（ぶちようほう）

ここでは、芸事ができないことの意。

とんだ雛祭り（ひなまつり）

前の長次郎の台詞の“目正月”に掛けた言葉。

意味は同じく、思いがけなくすこぶる楽しいものを見た様子。（※螢造語）

月代（さかやき）

男の額の髪を頭の中央にかけて半月形に剃り落としたもの。

早桶屋（はやおけや）

早桶は棺桶の粗末なもの。ふつう、死人があつた時に急ぎ作る。

たが屋

竹を割って輪を作り、桶や樽にはめて外側を固く締めて修理する。本来は、道具を入れた箱やたがの巻いたのになって町を流した出職。

手間賃（てまちゃん）

職人などの手間に対して支払われる賃金。

波銭（なみせん）

四文銭のこと。裏面に波の紋があったことから呼ばれた。

読本書き（よみほんかき）

読本は、絵本、謡い本などに対して読むことを主とした文芸書のこと。

つまり読本書きは現在でいうところの小説家。

十返舎一九つてえと・・・マヌケな話か（じゅっぺんしゃいっく）

『東海道中膝栗毛』のこと。

一分自慢（いちぶじまん）

ひとり自慢。うぬぼれ。

泣本（なきほん）

初期の人情本。男女の悲恋などを描いて読者を泣かせようとする作風が多かったところから。

真猫になった（しんねこ）

しんみりねっこりの略。男女が差し向かいで睦まじくする様子。

大見世（おおみせ）

吉原の遊廓で格式の最も高い遊女屋のこと。

相惚れ(あいぼれ)

相思相愛のこと。

三馬先生

式亭三馬のこと。江戸後期の滑稽本『浮世風呂』『浮世床』などの作者。

干上がっちまっちゃ・・(ひあ)

ここでは、生計がたたなくなるの意。

矢立(やたて)

墨壺に筆を入れる筒のついたもの。携帯用の筆記用具。

戯れうた(ざれうた)

滑稽味のある和歌や俳諧歌のこと。

手習い師匠(てならいししょう)

習字や学問などを教える先生。

文月や・・・

秋の気配が感じられる七月の、明日は七夕だとおもうと六日もいつもの夜のようにではなく、なんとなく趣がかんじられる。

七夕や・・・

旧暦では、七月は夏と秋を分ける時期であることから。

お心入れ

心づかい。

台帳（だいちょう）

売買の記帳をした帳面。大福帳。

つむじ曲がり

性質がねじれていること。またはそういう人。

おでべり芝居

江戸三座（中村座・市村座・森田座）以外の小屋掛け芝居のこと。菰垂れで小屋掛けし、湯島天神や両国橋の東西広小路などで行われた。

菰（こも）

藁であらく織ったむしろのこと。昔は真菰を利用したらしい。

本渋うちわ（ほんしぶ）

柿渋を表面にひいた赤黒くて粗末なうちわ。でも、丈夫。

更紗うちわ（さらさ）

更紗模様のあるうちわ。

反古うちわ（ほんご）

文字などを書きそんじて不要となった紙を用いて作ったうちわ。

駿河（するが）

現在の静岡県中央部。

生まれ在所（うまれざいしよ）

故郷のこと。

迷い蟹（まよいがに）

貝に混ざって小さな蟹と一緒に煮られていた。

八幡さまの祭り（はちまん）

深川八幡（富岡八幡宮）の祭りのこと。八月十五日が有名。

永代橋が崩れ・・・（えいたいばし）

文化四年八月の八幡祭りの時に、群集の重みで永代橋が崩れたという事件。

無体な話（むたい）

無理な話の意。

じゃらけっばい

色めかして戯れる様子。

枕本（まくらぼん）

春画の本。

江戸町（えどちょう）

吉原廓内の町の名。現在の台東区千束四丁目あたり。

オハコ

最も得意とするもの。十八番。

猪牙舟（ちよきぶね）

細長くて屋根のない先のがった舟。舟遊びなどに使われた。

いなせ

粹で勇み肌な様子。

おんもり

おっとりの意。

小見世（こみせ）

小さな娼家。下級の女郎屋。

照降町（てりふりちょう）

現在の日本橋小網町と小舟町の間を通り。

下駄屋と雪駄屋、傘屋などが軒をならべていた。

お内証（ないしょう）

ここでは妻のこと。

片意地（かたいじ）

あくまでも我意を通そうとすること。

相森神社（すぎのもりじんじや）

現在の中央区日本橋堀留町にある神社。富くじ興行がおこなわれた。

勾引（かどわかし）

誘拐のこと。

しゃにむにすぎる

がむしゃらすぎるの意。

横紙をやぶった（よこがみ）

無理を押し通すこと。

常磐津（ときわす）

浄瑠璃流派のひとつ。歌舞伎の舞踊劇の音楽としても用いられる。

差配（さはい）

とりさばくこと。指図すること。

井戸替え（いどがえ）

井戸の水をすっかり汲み上げて井戸を掃除すること。七月七日に行った。

化粧側（けしょうがわ）

井戸の地上にあらわれてる部分。

日輪様（にちりんさま）

お天道さまのこと。

麦湯（むぎゆ）

麦茶のこと。

竹村伊勢（たけむらいせ）

吉原遊廓内にあつた有名な菓子屋の屋号。巻き煎餅と最中が有名だった。

山屋（やまや）

吉原揚屋町の豆腐屋の屋号。

当て推量（あてずいりょう）

根拠もなしに推し量ること。

禪祝い（ぜんいわい）

男女十三歳か十五歳に行く成人式の祝い。

禪親（ぜんおや）

禪祝いに後見人となつてもらう仮の親。

紅板（べにいた）

紅を二つ折りの金属板、または象牙、べっこうなどで出来た薄い箱状のものや厚紙に塗ったもの。指先で溶かして塗る。

戸神様（いどがみさま）

井戸を護る神様のこと。

自身番（じしんばん）

各町内に設けた番所。家主たちが交替で詰め、町内の出来事を処理した。

中間部屋（ちゅうげんべや）

中間は武家に奉公して雑役を仕事としていた者のこと。

この部屋で、よく秘密で博打がおこなわれた。

鎮まりやがって（しず）

ここでは、落ちつくの意。

見過ぎ世過ぎ（みすぎよすぎ）

ここでは境遇の意。

冥利にあずかれっか（みょうり）

善いことをした報いとして利益をえられるかもしれないの意。

町役（ちょうやく）

町奉行の支配下で、各町々の民政にあたる町人。名主、月行事（がちぎょうじ）などとも呼ばれる。

紅勘（べにかん）

紅屋。ブランド。

垢離場（こりば）

神仏に祈願するため、冷水を浴び体の汚れをとって清浄にする水垢離をおこなう場所。

土左衛門（どざえもん）

水死体のこと。

無二無三（むにむさん）

わき目もふらずひたすらな様子。

実（じつ）

誠。真実。

しんこ細工（しんこざいく）

白米を日光に乾かして粉にしたものを水で練り、花や人形などを作った細工菓子のこと。ここでは、遊女が客に真心をみせるために小指を切る際、本当には切らないで、しんこで作って渡したことを指す。

あきれけえりやんした

呆気にとられてしまいましたの意。

おめもじ

お目にかかること。

かわたれ時

薄暗くて「彼（か）は誰（たれ）か」はつきりわからない時刻のこと。

明け方、夕方の薄暗い時刻。（後には、夕方のたそがれ時に対して明け方をいった）

おがみいす

お願いしますの意。（遊女語）

おかたじけえ

ありがとうの意。

知る辺（しるべ）

知り合いの人。ゆかりのある人。

癩をたて（かん）

怒るの意。

実を見せた（じつ）

真心を見せたの意。

茶にして（ちや）

茶化して、馬鹿にしての意。

唐文字（からもじ）

漢字のこと。

埒もねえ(らち)

つまらないの意。

京伝先生(きょうでんせんせい)

山東京伝のこと。

あつちは鰻の蒲焼(うなぎのかばやき)

山東京伝作『江戸生艶気蒲焼(えどうまれうわきのかばやき)』を指す。

おけら

無一文のこと。

艶二郎(えんじろう)

『江戸生艶気蒲焼』の主人公の名。

棒引き(ぼうびき)

金銭などの貸借関係を解消すること。

十の字の尻をまげ・・(じゅうのじのしり)

質に入れる意味の隠語。十の字の尻を右に曲げれば七の字となることから。

“まげる”に、質入れするの意味もある。

暑気あたり(しよき)

夏の暑さのために病気になること。

世辞でまるめて浮気で捏ねる(せじでまるめてうわきをこねる)

粉をこねて団子を作るように浮気心やうれしがらせなどで人を丸め込むこと。

恋は意外の正無事（こいはいがいのまसानごと）

人は恋のためには常識では考えられないような良くないこともするものだという諺。

空家で棒をふるような（あきやでぼう）

誰にも当たり障りのないこと。

浮生（ふぜい）

人生。

河童天王の祭り（かっぱてんのうのまつり）

現在の品川区北品川三丁目にある品川神社のまつり。六月十九日の祭礼の前日、神輿を海中に乗り入れた。勇壮で威勢のいい様子から“河童天王”の名がついたらしい。

いけすかない

性質、態度などが気に染まなく嫌なこと。

仕舞屋（しもたや）

商店でない普通の家のこと。

憑き物がおちたみたいに（つきもの）

もののけが消え去ったような様子。

中ッ腹を並べちゃ（ちゅうつぱらぎ）

腹をたてて、ぼんぼんと言うこと。

にゅうめん

素麺を味噌または醤油でさつと煮たもの。

たまごのふわふわ

鶏卵をふわふわと柔らかく煮て、吸い物にしたたもの。

やつとう

剣道のこと。

おえねえやつ

しょうのないやつ、手に負えないやつの意。

草市(くさいち)

七月十二日の夜から十三日の朝にかけて盂蘭盆に供える草花や品々を売る市のこと。

蓮飯(はすめし)

蓮の若葉を蒸して、細かく刻み塩とともに飯にまぜたもの。

宿六(やどろく)

亭主を親しみ、あるいは卑しみをこめて言った語。

おきもじさま

御気文字はお心、ご気分の意。お気の毒の意味もある。

ここでは「ごきげんよう」と「お大事に」の中間のニュアンス。